

新 水 掛

SINMIZUKAKE

1981

茅野市教育委員会

新 水 掛

—市道3ブロック425号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—

1981

茅野市教育委員会

序

新水掛遺跡は、尖石遺跡の栄光の陰にかくれたような存在で、古くから知られた遺跡でありながら、計画的な発掘調査の行われることなく今日に至った。今回、はからずも道路拡幅ということで、遺跡中央にあたかも一本のトレンチを設定したような調査を行うことができた。発見された遺構・遺物は少なかったが一応遺跡の規模、性格を把握することができ、尖石に劣らず重要な遺跡であることの認識をあらたにすると共に、今後の遺跡の保存及び調査についての資料を得ることができた。

調査は茅野市からの委託事業として、茅野市教育委員会の設置した新水掛発掘調査委員会により行われ、尖石考古館宮坂虎次・鵜飼幸雄が担当し、報告書の執筆は守矢昌文を加えて3名が分担した。

発掘作業については地元上場沢区の方々の助力があり、また工事請負者泉建設の重機の提供等の協力が得られて予定通り終了することができた。

調査委員会並びに関係者に対し厚くお礼申し上げるとともに、種々の事情により報告書の刊行の遅延したことをお詫び申し上げる次第である。

昭和56年9月

茅野市尖石考古館

館長 宮坂虎次

例　　言

- 1 本書は茅野市豊平上場沢新水掛遺跡内の市道3ブロック425号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は新水掛遺跡調査委員会が茅野市より委託を受けて行ったものであり、調査委員会等の名簿は発掘調査関係者名簿として別掲してある。
- 3 発掘調査は昭和52年11月5日から11月15日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は茅野市尖石考古館において行った。
- 4 石器の石質については両角昭二氏（茅野市永明中学校長）に鑑定していただいた。また、遺物の整理にあたっては宮坂篤夫・柳平嘉彦両氏の協力を得た。
- 5 第22図は北沢和男氏（岡谷市神明小学校教諭）原図の「北八ヶ岳西山麓の地形面区分図」を基に執筆者の一人である鶴飼が作成し発表した（鶴飼1981）ものである。図の指標にあたっては北沢氏の快諾も得た。ここに記して深く感謝の意を表したい。
- 6 本書は宮坂虎次・守矢昌文・鶴飼幸雄の3名で分担執筆した。執筆と項目の関係は以下の通りである。

宮坂虎次……第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅳ章
守矢昌文……第Ⅴ章第2節・第VI章第1節
鶴飼幸雄……第Ⅲ章・第Ⅳ章・第V章第1節・第VI章第2節
- 7 出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 調査経緯 1

　第1節 調査にいたるまでの経過 1

　第2節 発掘調査の経過 1

第Ⅱ章 遺跡概観 4

　第1節 立地および地理的環境 4

　第2節 歴史的環境 4

第Ⅲ章 層 序 8

第Ⅳ章 遺 構 10

　第1節 ピット群 10

　第2節 屋外埋甕 12

第Ⅴ章 遺 物 13

　第1節 土 器 13

　第2節 石 器 21

第VI章 調査の成果と課題 29

　第1節 新水掛遺跡出土の打製石斧について 29

　第2節 新水掛遺跡の素描 31

第VII章 結 語 39

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	新水掛遺跡と周辺の遺跡	3
第3図	遺跡周辺の地形と発掘位置図	5
第4図	新水掛遺跡既出土偶(1)	6
第5図	新水掛遺跡既出土偶(2)	6
第6図	A-26・A-30・C-1・C-11・C-15・D-7 北壁セクション図	8
第7図	発掘区グリッド図	10
第8図	ピット群と屋外埋甕	11
第9図	屋外埋甕セクション図	12
第10図	出土土器(1)	14
第11図	出土土器(2)	15
第12図	出土土器(3)	17
第13図	出土土器(4)	18
第14図	出土土器(5)・屋外埋甕	19
第15図	出土土器(6)	20
第16図	出土石器(1)	22
第17図	出土石器(2)	23
第18図	出土石器(3)	26
第19図	平面形状と自然面残存状態の相関図	29
第20図	平面形状と湾曲の相関図	29
第21図	自然面と湾曲の相関図	30
第22図	八ヶ岳西山麓の地形と中期後半の遺跡	36
第23図	藤内遺跡の集落のあり方と特殊遺構の位置	37

表 目 次

第1表	出土石器一覧表	28
-----	---------	----

写真図版目次

- 図版 1 1 新水掛遺跡の台地（尖石付近より） 2 尖石遺跡の台地（新水掛の台地より）
- 図版 2 1 発掘区近景（東より） 2 ピット群と屋外埋甕
- 図版 3 1 A-19・20・21北壁セクション 2 ピット群（A-19・20）
- 図版 4 1 ピット群（A-20） 2 ピット群（A-20・21）
- 図版 5 1 P₁内土器出土状態 2 P₁と土器
- 図版 6 1 P₂ 2 屋外埋甕発見状態
- 図版 7 1 屋外埋甕埋設状態 2 屋外埋甕セクションの状態
- 図版 8 出土石器
- 図版 9 出土石器・出土土器

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 調査にいたるまでの経過

新水掛遺跡は、昭和12年に宮坂英次が林道を小発掘して、土偶頭部と繩文中期上器を発見している。その後、2回程小発掘を試みているが、計画的な調査は行われることなく今日にいたった。

遺跡台地の南寄りに東西の林道が通じ、かつては、農耕用か木材運搬の車が利用するだけであった。近時、遺跡の東方700mで三井の森別荘地の開発が行われるようになってから、工事関係の車輛の往復が増加し、市道としての機能を全うするため、幅員3.5mであったものを6.5mに拡幅することとなった。年度内に完成が予定され、遺跡外ではすでに工事が進捗して発掘は急を要した。

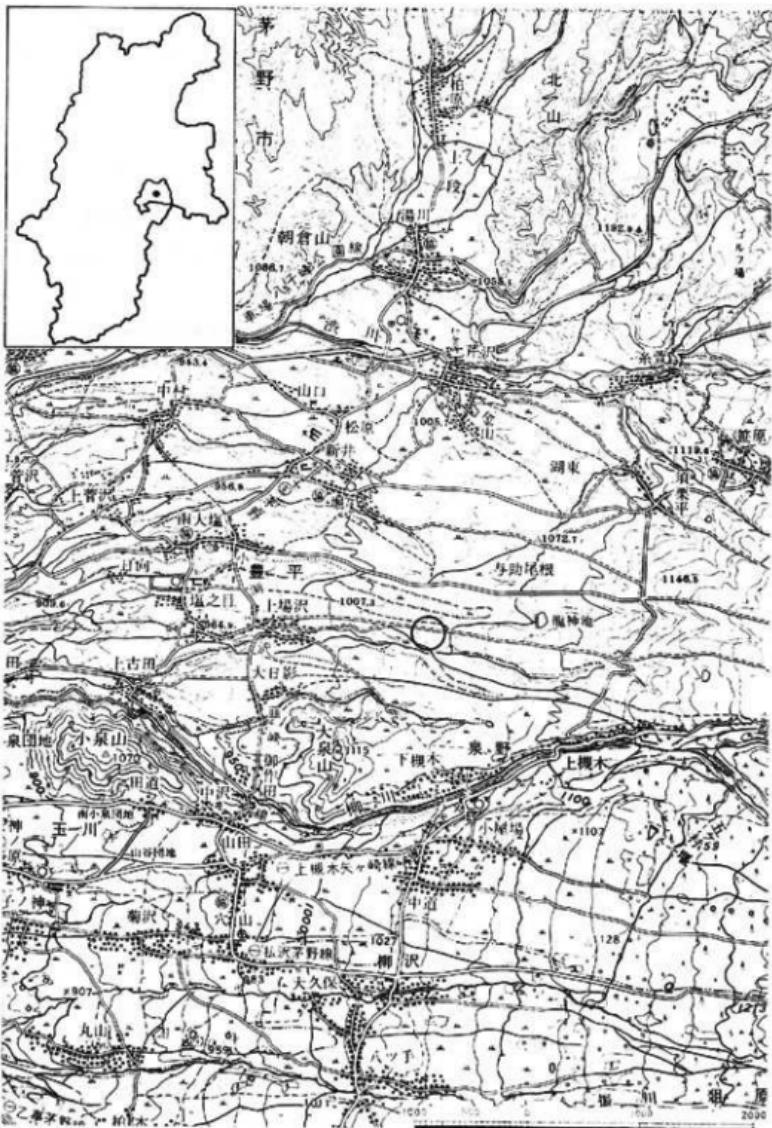
昭和52年10月26日付で文化庁に緊急発掘届を提出し、11月1日に調査委員会の役員を委嘱、4日に委員会を開催した。そして、茅野市長原田文也と、新水掛調査委員会委員長小川由加里との間に委託契約を結び、調査費45万円にて事業を実施した。

第2節 発掘調査の経過

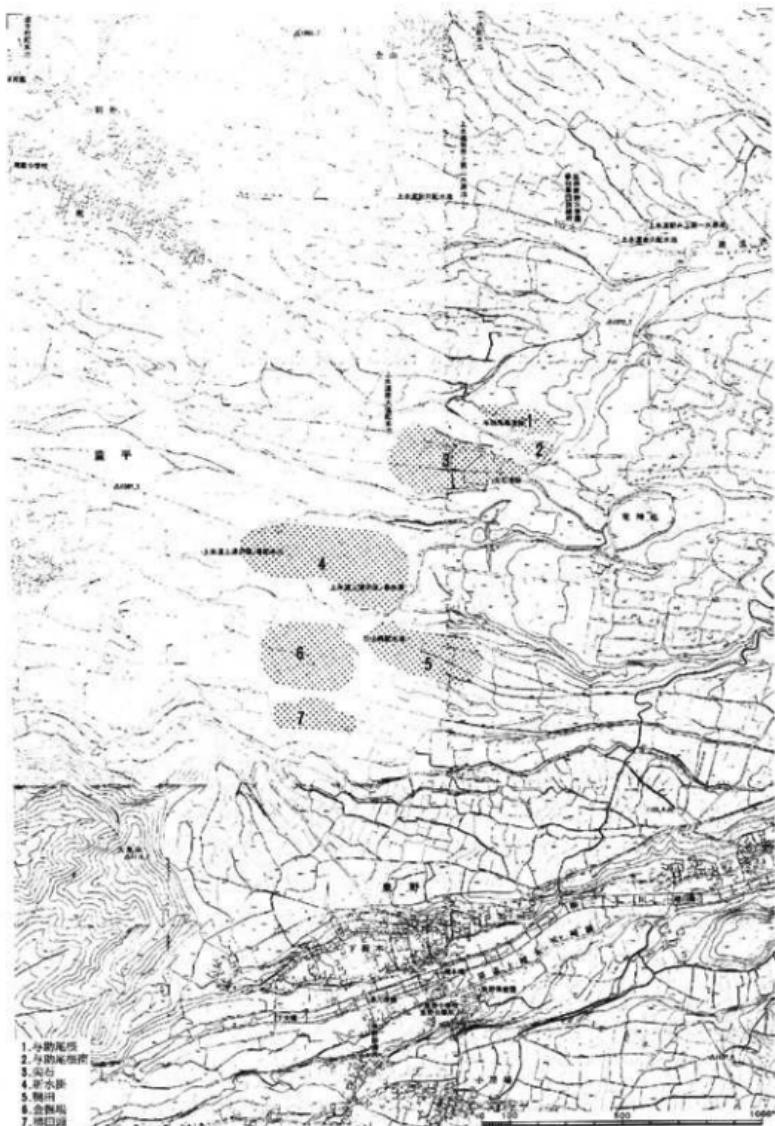
拡幅する道路の南側は山林で、北側は畑である。工事は場所により北側の畑は幅4mに及ぶ部分もあるが、南側山林への拡幅は総体的に狭いので、北側の調査結果をみて精査することとした。既設の路面は台地表土を切ってつくられ、交通により土層が圧縮されているので、畑面よりかなり低い部分もある。車輪の通行の無かった時代は、黒土中に遺物の包含が認められた。道路面を試掘したが土層は擾乱されてローム面も荒廃し、遺構の残っている可能性が殆んどないことが判明した。

調査は道路北側の畑に道に沿って幅2m、長さ4mのグリットを設定し、北よりA、B、C Dとし、東から1~36とした。グリットの総延長は160mである。北側の林は拡幅される幅が狭いため、西部分は幅1m長さ28mのトレンチを設定し、東部分は状況により適宜にピットを設定した。

11月5日に発掘作業を開始し、幸い好天気にめぐまれて15日には終了することができた。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 新水掛遺跡と周辺の遺跡 (1/20,000)

第II章 遺跡概観

第1節 立地および地理的環境

新水掛遺跡は特別史跡尖石遺跡の南の台地に立地する。尖石台地とは幅100mの溪をへだてて平行する台地である。遺跡一帯は標高1030～1050mで、尖石遺跡（1060～1080m）より若干低い。

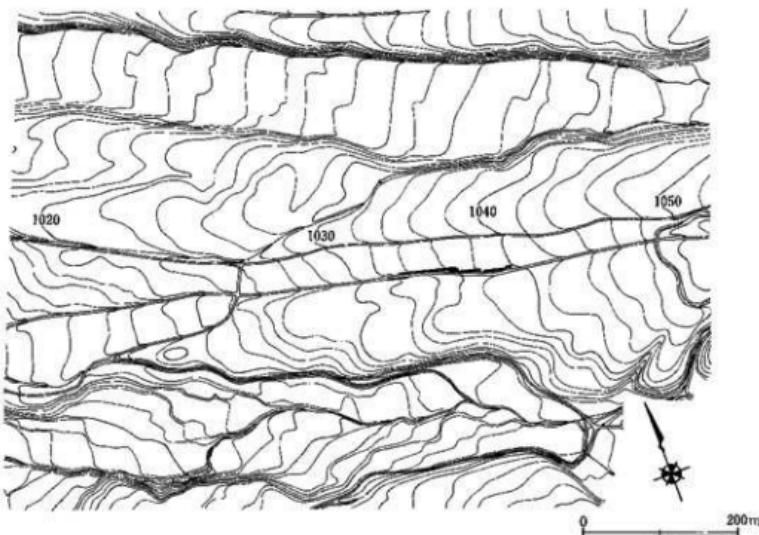
八ヶ岳西山麓は火山活動による堆積物により形成され、上部を御岳・飛騨火山の新期風成ロームが覆っている。そして天狗岳と美濃戸山中の火口湖を水源とする柳川渓谷により南北の裾野に大きく区分される。柳川から、蓼科山を水源とする滝之湯川までの幅4～6kmの～帯は北山浦と呼ばれている。そして山裾の各所からの湧水により浸蝕された谷により更に数条の東西に長い台地に区分される。台地の基部は幅広く、葉身部から末葉部にかけては次第に複雑に分岐し、その末端は舌状を呈している。そして台地上には数多くの遺跡が立地する。

この中で、尖石・新水掛遺跡の立地する両台地は典型的な幅の広い長咲状台地で、遺跡より西約4.5kmにて尽きる。両遺跡とも台地の最上部に位置する遺跡である。

新水掛遺跡の台地の幅は約250～300mで、北側は急な崖面で谷との比高は14mである。南側はやや緩かで、斜面の中段を農道が通じている。かつて、この農道拡幅の際に土器が出土している。台地上の農道と、この農道との間は林で、土層の擾乱は殆んどないものと思われる。したがって遺構の完全に保存されている地帯である。谷を距てて南は金掘場遺跡の立地する台地である。新水掛遺跡台地と、金掘場遺跡台地との間に狭い渓谷により区切られて金掘場遺跡台地より分岐し、舌状を呈する台地があり、これが鴨田遺跡である。これら遺跡を周囲に点綴する谷が鴨田で、豊富な湧水が水田を潤し、冬季この温い湧水を慕い、また早春の雪間に萌ゆる水辺の青い草を求めて野鶴が多数群集した。それで村人はここを鴨田と呼び、小字名となっている。これら湧水により台地の裾が浸蝕されてノッチ状を呈している。湧水は現在も重要な水源として利用されている。

第2節 歴史的環境

小字名「新水掛」は、かつて農耕馬の飼料として、また、肥やしとして大切な草の生育をよく



第3図 遺跡周辺の地形と発掘位置図 (1/7,500)

するため、冬期間湧水や用水汐の水を引いて、かけ流しをした場所であったためつけられた字名であろう。このことは、かつてはこの台地が村人にとって大事な採草地であったことを示すものである。台地中ほどに馬捨場と呼ばれた場所があり、これは死馬を葬ったところである。台地が開墾されたのは、尖石台地と同じように養蚕が盛んになった明治中頃以後と推定され、土偶の発見された昭和12年頃は、ほとんどが桑畑であった。

諏訪史第一巻(大正14年)の「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」によると、豊平上場沢地区の遺跡としては、金掘場・ヨキトギ日向の2ヶ所しか記載されていないので、新水掛遺跡の発見はそれ以後のことである。

昭和4年から宮坂英式による尖石遺跡を中心とした一帯の調査が始まり、翌5年に「小平幸衛氏と立石遺跡・新水掛遺跡を発掘」とある。当時、泉野小学校に勤務していた宮坂は、帰途しばしば近道をして尖石に立寄ったというから、道すがらの表面採集により着目したものであろう。次いで「昭和9年8月小平幸衛氏と鴨田を発掘し、土器を発見」とある。昭和12年には新

註(1) 烏居龍三 1924『諏訪史第1巻』信濃教育会諏訪部会

(2) 長野県考古学会 1980『宮坂英式先生年譜・著書・論文・報告等目録』『長野県考古学会誌』第35号

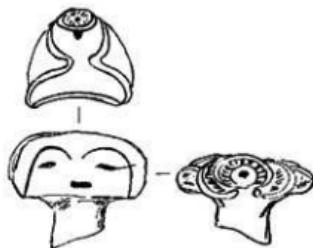
(3) 註(2)に同じ。

水掛の林道で土偶を発見し、「中部考古学会集報2-6」にその時の記録が載せられている。学校の田植休みを利用しての遺跡探訪で、小学校5年生であった私もついていった。梅雨時で雨模様の中を、この土偶1点を得て、大変な喜びようで帰路についたことを覚えている。土偶は林道の路面に土器片が含まれている場所の、僅か10cmの深さからの出土である。同報文より土偶についての説明を抜粋する。

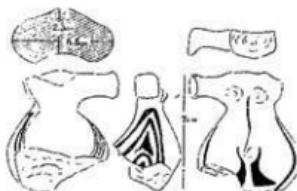
「土偶は地下10cmの黒土層中より得た。それは斜めに切断された円柱の頭部と盤状の頭部となりなり、頭面は下底平に、上部半円形をなす。眉端は長く垂れて下底に達す。柔軟なる眼、微笑せるかの如き半開の口が素朴に写実的に表現されている。頭部の中心を貫いてマッチ軸大の孔がある。この孔に棒を通して胴部に附着せしめたものであろうか。頭頂部は半円形の盤状をなし、そこに左右各二条粘土紐が付され、恰も頭髪のうねりを示したるが様である。後頭部には同じく粘土紐にて円を描かしめ、その中央に一孔を穿ち頭上に貫通せしむ。円は結髪の状を、孔は簪の穴を夫々示して居る様である。孔の周囲には突刺紋を施して毛髪の集中を表現する。焼成堅牢で重いが、表面は粗鬆で黒色を呈する。」

翌13年6月に再び小発掘を試み、先年土偶の出土した地点より西20m離れた林道脇の畦畔より土偶の胴部⁽²⁾が発見された。この土偶は頭部と左手、両足を欠く妊娠土偶で、高さは7cmである。また、8月に入り、妊娠土偶の出土した地点から僅か離れた林道の黒土層10cmの深さから土偶の頭部が検出された。⁽³⁾

その後は尖石・与助尾根遺跡の発掘に傾注して、新水掛は計画的な調査が行われることなく今日に至った。



第4図 新水掛遺跡既出土偶(1)宮坂1937より



第5図 新水掛け跡既出土偶(2)
宮坂1938・1939より

- 註(1) 宮坂英式 1937「信濃国駿賀郡上場沢の遺跡」『中部考古学会集報』第2年第6報
 (2) 宮坂英式 1938「八ヶ岳山麓駿賀郡新水掛け跡出土第2号土偶報告」『ひだびと』第6年
 第11号
 (3) 宮坂英式 1939「八ヶ岳山麓新水掛け跡発掘第3号土偶の報告」『ひだびと』第7年第1号

新水掛・鶴田・金掘場の三遺跡は、それぞれ三つの台地に聳立する形で立地する。新水掛遺跡がその占據する台地の広さに応じ最も規模が大きい。鶴田遺跡は、舌状台地の尖端に近い農道に、しばしば中期初頭の土器破片が露頭し、住居址も確認されたこともある⁽¹⁾。金掘場遺跡からは前期下島式や中期中葉後葉の土器片が採集されているが、その規模等については明らかでない。

金掘場遺跡の南の瘦尾根に稗田頭遺跡が立地し、中期の小規模遺跡である。

新水掛遺跡と同台地の西方1.5kmに、前期織維上器や下島式土器を出土する向原遺跡があり、2.5km西にH向上遺跡が立地する。日向上遺跡は八ヶ岳西山麓において最も早く住居址が発掘されたところで（昭和14年）、前期下島式・中期・後期の土器が出し、中期後半のかなりの規模の集落遺跡と推定される。

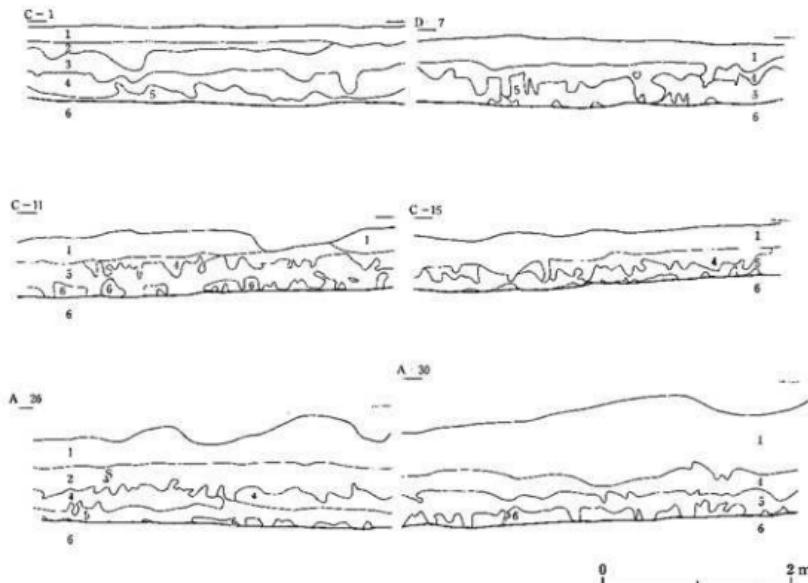
註（1） 昭和39年11月、泉野口鶴寺遺跡調査の帰途、その昔宮坂英式が尖石に立寄るために通った道筋を辿った。鶴田・新水掛遺跡がその通り道にあたり、鶴田遺跡は若干林道の拡幅が行われたあとであった。雨水により側溝の部分がきれいに洗い流されて、黒土中に多量の炭屑のまじった場所が見られた。側溝の部分を移植ゴテで削り住居址の固い床面を確認したが道路敷であるため、それ以上の調査はできなかった。採集された土器は中期初頭梨久保式に比定されるものであった。

（2） 宮坂英式「1966『豊平の原始文化』『豊平村誌』豊平村誌編算委員会

第III章 層序

層序の観察は、最初に調査したC-1グリッドでの土層の堆積状態を基準として、C-1・D-3・D-7・C-11・C-15・B-18・A-16・A-30・A-34の各グリッド北壁面と、D-3・A-30の西壁面で行った。また、遺構の発見されたA-19・20・21でも同様に北壁面で行い、それぞれ実測図を作成した。各グリッドに共通する土層名は以下の通りである。

- 1層……表土層で現在の耕作土層
- 2層……硬くしまりのある黒色土層
- 3層……漆黒色土層
- 4層……黒褐色土層
- 5層……粘性の少ない黄褐色土層
- 6層……ローム層



第6図 A-26・A-30・C-1・C-11・C-15・D-7 北壁セクション図 (1/60)

今回の発掘区は標高1032m～1040m台内にほぼ位置している。このため、発掘区内の東端と西端のC-1からA-36までの3枚の畑にまたがる約160m間はほぼ8mほどの比高差にある。地表面からローム面までの深さは1～25列迄までは80～90cmほどであり、26列以下34列までは100cmほどとなる。これは、第1層である耕作土層が、これらのグリッドの位置する発掘区内でも西側の畑に厚く形成されているためである。また、C-1で観察された2層と3層は他のグリッドのすべてに同様に形成されているわけではなく、2枚ともに欠くグリッドがほとんどである。特に2層は発掘区最上位に位置するC-1とD-3にのみ観察された。一方の3層はC-1・D-3・B-18・A-19・20・21・A-26にみられた。各土層内は垂直方向の擾乱が激しく、しかも深く及んでいる。5層中には4層がかなりは入り込むと同時に、また逆にロームブロックが浮上している。畑は現在一面に蔬菜類を栽培しているが、かつては一面桑園であった。4層・5層の擾乱の状態は一帯が桑園であったことを物語っているのだろう。遺物は1層から4層上部にかけて出土し、特に4層上部から比較的多く出土した。

第IV章 遺構

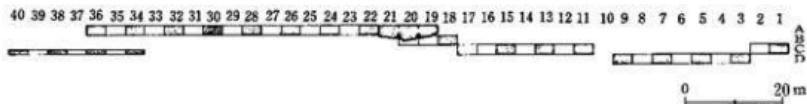
発見された遺構は縄文時代中期中葉のピット群と屋外埋甕が1基である。

第1節 ピット群（第8図、図版3-2・図版4）

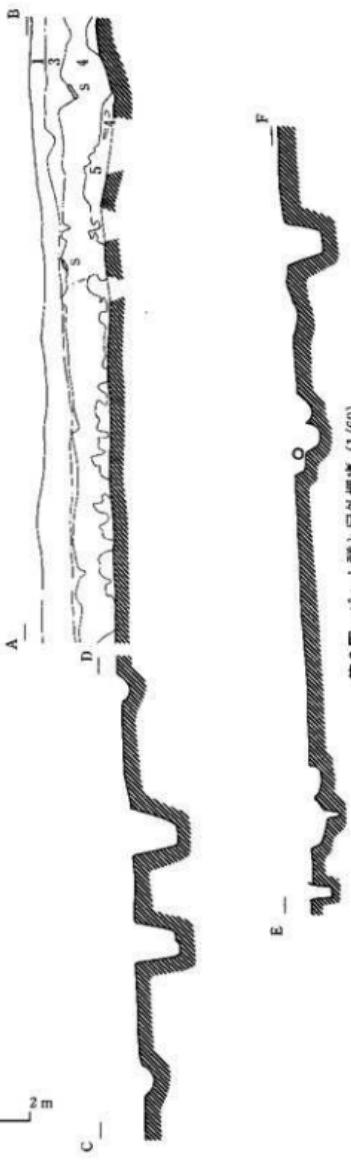
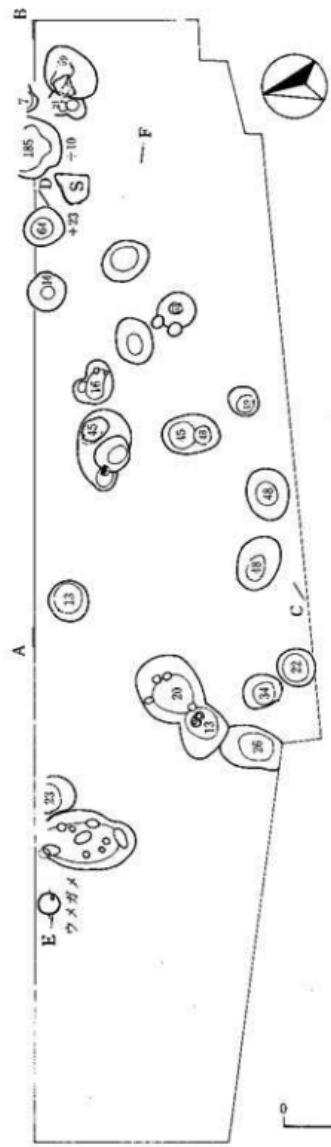
ピット群は、第15図121の土器を有するP₁の検出を契機にその周囲を精査し、存在が明らかになった。ピットはいざれもローム層中へ掘り込んでおり、一見して竪穴住居址の柱穴と思われる形態にある。また、それらのピット群のなかでも比較的深いものが弧状に配されていることから、当初中期中葉の竪穴住居址の存在が予想された。このため、ピット群と共に床面や炉址周溝・壁等の検出に努めたが、ピットは容易に検出されたものの、他の施設は何等発見されなかった。そのうえ、住居址を想定した場合、ピットの展開状態から、そのほぼ中央部を東西に切るA-19・20の北壁ラインでのセクション観察によても、住居址の覆土をおもわせるような土層の堆積状態はみられなかった。このセクションでの土層の堆積状態は、遺構の発見されなかった隣接するB-18北壁セクションと同様の層状を示していた。このように住居址としての積極的証左に乏しいため、これらの遺構を住居址の一部として捉えることを避け、特殊な施設のピット群として理解した。

発見されたピットは、前述したとおりほとんどが竪穴住居址に一般的な柱穴の形態を有している。このうち40cm以上の深いものが発掘区の南側から東側へかけて弧状に分布しており、西側には比較的浅いピットが設けられている。

以上の柱穴様のピットとは異なるピットが2基発見されている。1つはピット群発見の契機となったP₁であり、弧状に展開するピット群の内側に位置している。形態はもう一方のP₂と共



第7図 発掘区グリッド図 (1/600)



第8図 ビット群と屋外埋設 (1/60)

に他のピット群とは異なり、この2つのピットは、小型ながら土壙として経験的に分類されているものにより近い形態にある。P₁は斜傾する柱穴状のピット以外に下部に小ピットが2つ重なっている。P₁内の覆土は、覆土の不明な斜傾する柱穴状のピット以外、上部から底面まで同一の土層であった。土層はロームの粒子や炭化物をかなり含んだ黒褐色土である。下部の小さな2つのピットがP₁に伴うものかどうかは判然としないが、セクション観察では土層は同一であり、P₁に伴うもののように思われた。出土した土器は第15図121の深鉢形土器であり、横転した状態で底面より3cmほど浮いた位置で出土した。P₁内からの出土遺物は本土器一體のみである。P₂はP₁とでは長軸方向が90°異なっており、弧状に展開するピット群の外側に位置している。平面形は梢円形を呈しており、底部に幾つかの小ピットを有している。断面形はタライ状を呈しており、出土遺物はなにもない。

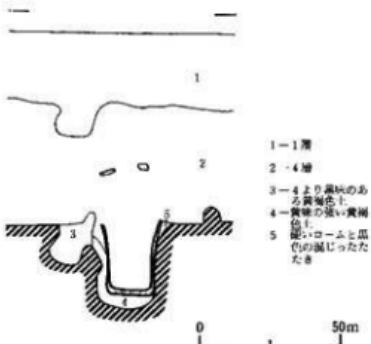
遺構の発見されたA-19・20・21より出土した土器はすべて縄文時代中期中葉のものであった。また、P₁内出土土器も中期中葉のものであったことからみて、これらのピット群は同期の遺構と考えられよう。

第2節 屋外埋甕（第9図、図版6-2・図版7）

ピット群の精査と、それに伴う遺構の検出を進めるなかで発見された。

埋甕はA-23北壁下でピット群の北西部に位置している。埋甕から西側には遺構が発見されていないため、その位置は丁度ピット群の設けられている空間を他の空間と限る位置のようにも見受けられる。

埋甕はローム層を30cmほど掘り込んだ掘り方内に正位の状態に埋設されている。使用された土器は第14図の深鉢形土器であり、口縁を欠損する他は完存する。土器は掘り方の一方の壁に器体をあて、壁に接つしてきっちりと丁寧に埋設されている。蓋はなく、埋甕内は埋甕を被う第4層と同じ炭化物を含んだ黒褐色土が入り込んでいたのみで出土遺物はなにもない。埋甕の周辺にはピット以外になんら施設はない。



第9図 屋外埋甕セクション図 (1/20)

第V章 遺物

第1節 土器

今回の調査で出土した土器は、屋外埋葬とP₁出土のもの以外はすべて破片であり、その量は整理箱に1箱ほどである。土器はほとんどが縄文時代中期中葉のものであるが、なかに数片時期の異なるものもある。縄文時代中期中葉の土器は、破片の場合だと大別型式ならともかく、細別型式まで判定を下すには困難な場合が多い。そこで、細別型式の判定に困難なものは型式の枠を外し、特定の文様に基づいて分類することとする。以下にそれぞれの類別された土器についての説明を記す。

1. 第1群土器（第10図1）

A-26で1片だけ発見された諸巣b式土器の破片である。文様は細い隆線をヘラ切りした浮線文で構成される。胎土に白色の小粒子を含み、硬く焼きのよい土器である。色調は乳褐色を呈している。

2. 第2群土器

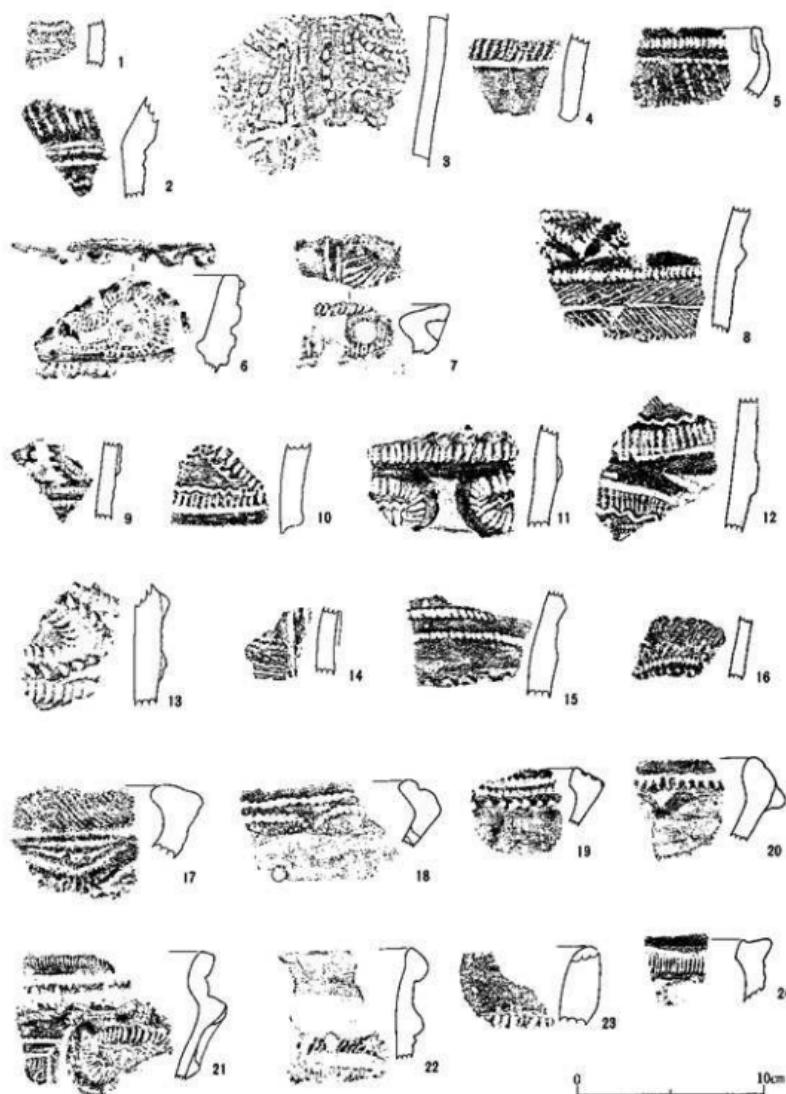
縄文時代中期中葉の土器群で、猪沢式から井戸尻諸式の前半ぐらいまでのものが含まれている。

第1類（第10図2～4）

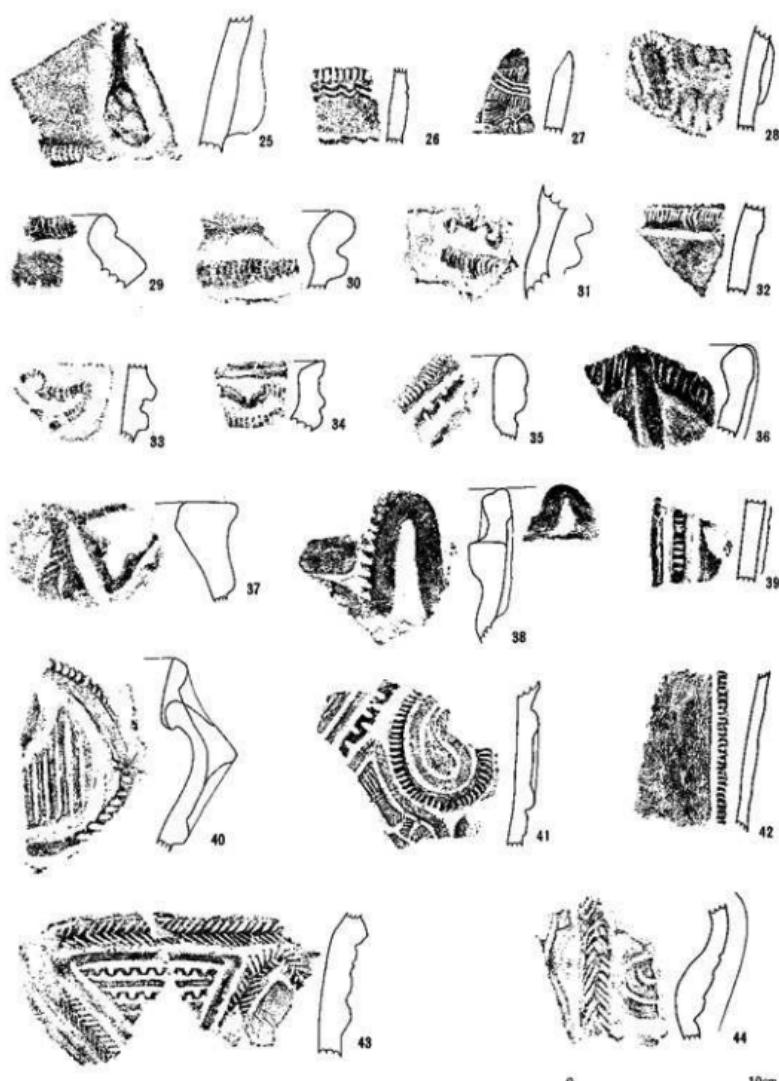
結節沈線を特徴とするもので猪沢式に相当すると思われるもの。2は細い丸棒状工具を施文具としており、施文方法や文様構成がこの類の代表的な例である。3は角棒状の施文具を用いており、部分的に結節化していない個所や施文の浅い部分があり、施文が均質でない。ここでは1類として扱ったが、文様構成や施文方法が均質でないこと、また全体に白っぽい感じがある等、本例は異質感が強い。他に類例を知らない資料である。4は底部付近であり、横位の隆帯がみられない。

第2類（第10図5～20）

ベン先状工具やヘラ状工具を施文具とした連続刺突文を特徴とするもので、新道式に相当するもの。5は同式に特徴的な口縁が内湾する深鉢。6は4単位の山形突起部の1ヶ所で、7は口縁部に円形の捻り把手を有す。口縁部に三角形区画の横帶文を構成するものであろう。8は横帶文間に形成される空間部を斜傾する沈線で充填している。9は連続刺突文が細かい小型の



第10圖 出土土器(1) (1/3)



第11図 出土土器(2) (1/3)

深鉢であり、10～13は連続刺突文が稍大で角押文となっている。14は胴部の破片である。隆帯により先端が渦巻文となる抽象文が構成される部分であろう。15・16は楕円区画を構成するもので、15は波状沈線が施文されている。17～20は浅鉢の口縁部である。浅鉢の施文はほとんどが口縁に限られるが、17は口縁下にも施文されており、特異な例である。18には補修孔の片一方が認められる。

第3類（第10図21～第11図33）

隆帯や隆帯の脇に爪形を呈する連続刺突文を加えたもので、藤内I式に相当する。21～24は深鉢の口縁部で、24には突起がつく。25は大波状口縁の深鉢で、波頂部から隆帯を垂下させている。28には指圧痕がのこる。29は口縁に、30は口縁下にめぐる隆帯に爪形の連続刺突を加えている。31は瘤状突起が上下に2つ突出しており、連続刺突と交互刺突を別々に加えている。32と33は胴部の破片である。

第4類（第11図34～第12図47）

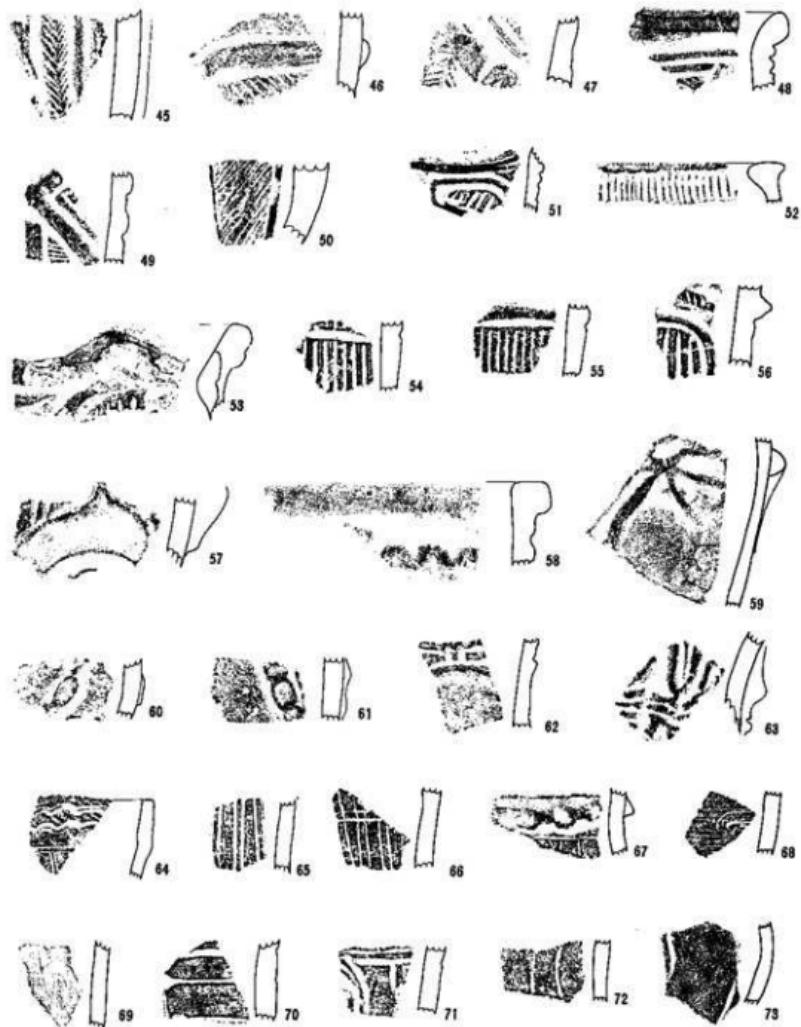
隆帯上にヘラ状工具を施文具とした刻目文をもつもの。ほとんどが藤内I～II式であるが、井戸尻前半期のものも含まれている。34は内湾する口縁部。35～38は口縁突起部。36・37には粗雑な刻みが加えられている。38は丸棒状工具で隆帯の角を突き、刻目様の文様としている。37・38は彫刻的な手法がみられ、第6類と共通する。39～42は隆帯上に細かな刺突を丁寧に加えている。40は口縁部で4単位の大波状口縁となり、口縁下に大きな楕円区画を有するもの。43～47は矢羽状に刻目を加えている。

第5類（第12図48～56）

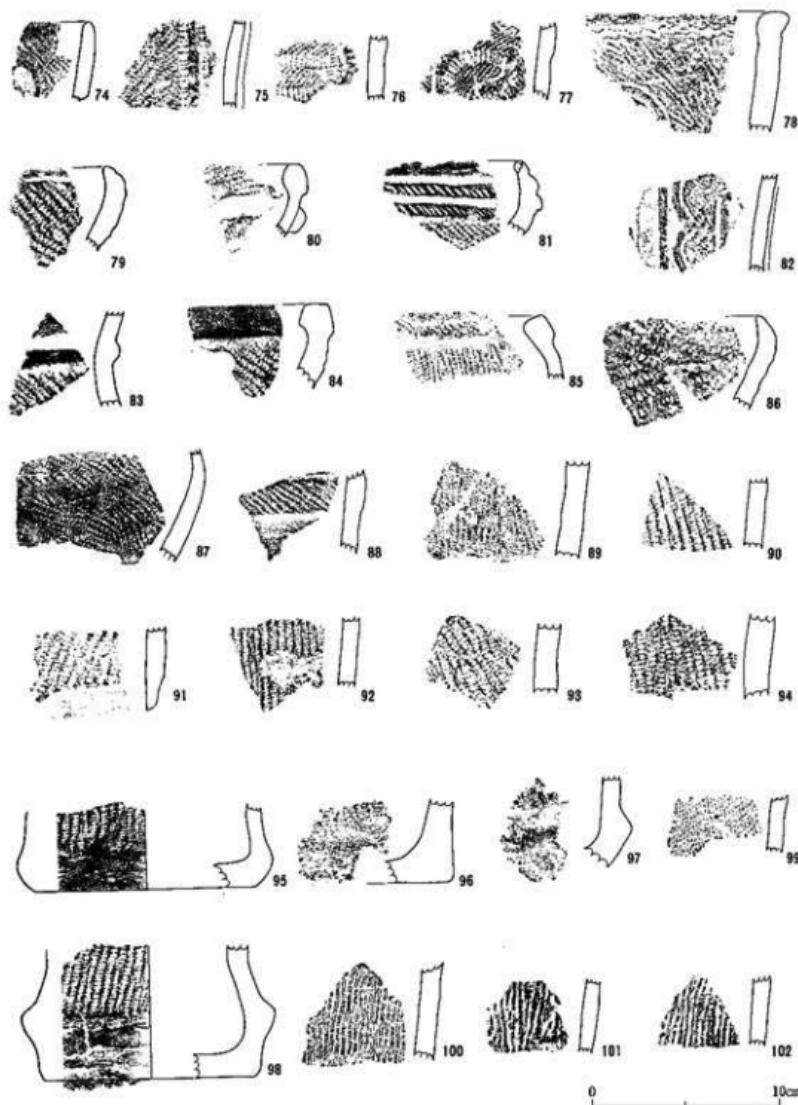
区画内に沈線を充填したもの。48～50は区画内へ充填した沈線が細く、条線状の施文となっている。これらは藤内I式に相当しよう。区画はいずれも幾何学的な文様構成をとっている。48は口縁部で突起がつく。51～56は区画内の沈線が太く深いもので、藤内II式～井戸尻前半に当る。区画はいずれも楕円を基本とし、沈線の施文は整然としている。

第6類（第12図57～62・第15図121）

施文の加えられない隆帯をもち、彫刻的な施文手法等を特徴とするもの。多くが井戸尻前半に相当すると考えられる。57は口縁の把手に連なる部分であろう。58は大型の深鉢で、厚い口縁下に交互刺突を加えた隆帯がめぐる。60・61は押圧隆帯が配されており、62には彫刻文が施文されている。121はP出土の櫛形文土器の胴下半部である。5単位の文様構成のうち2ヶ所は渦巻文を配しており、このような文様構成をとる櫛形文土器は他に例を知らない。底部・器表面はよく調整されており赤褐色を呈す。内面には炭化物の付着が認められる。



第12図 出出土器(3) (1/3)



第13図 出土土器(4) (1/3)

第7類（第12図63）

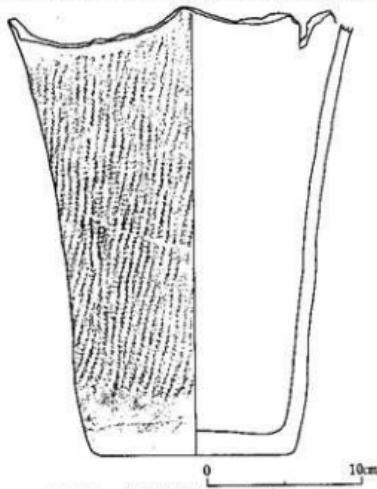
B-20で1点だけ出土した搬入品と考えられる資料である。隆帯で抽象的な文様を現し、隆帶上から器表面には深い沈線を施す。胎土に白色粒子を多く含み、器内面は赤褐色、器表面は灰褐色を呈す。焼成はあまりよくない。井戸尻式前半のものであろう。

第8類（第12図64～73）

沈線を特徴とするもの。64～69は平出三Aの破片である。胎土に白色粒子を多く含み焼成はよい。64はRL繩文、65はLR繩文を地文としている。いずれも新道式段階のものであろう。70は沈線の接する部分を陰刻している新道式のもの。71は藤内I式のものであろう。72・73は縦位の沈線が弧状に施文されている。72は胎土・焼成・色調からみて後期初頭のものかも知れない。

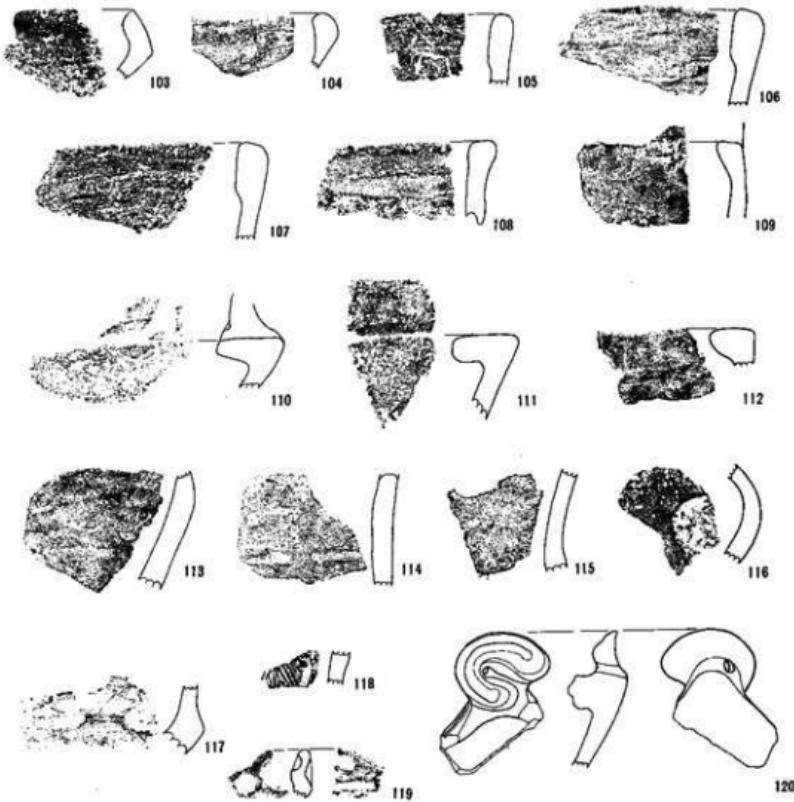
第9類（第13図74～98・第14図）

地文に繩文をもつもの。74～77は連続刺突文が伴う。74は小型深鉢の口縁で、細かなペン先状工具による連続刺突文が加えられている。75は隆帯の脇に施文している。76・77は同一個体で、細かなLR繩文の上に方形と横円形の文様を構成している。78～80は沈線が伴うもの。78は肥厚した口縁をもつ筒形を呈した大型の深鉢。79は内湾する口縁端に1本の沈線をもつ。80は断面方形の口縁で、隆帯に伴う凹線が施文されている。口縁には突起がつく。81～83は隆帯をもつもの。81は内湾する口縁に整然とした刻目をもつ隆帯が2本めぐる。82は隆帯と共に半



第14図 出土土器(5)・底外埋壠(1/4)

隆起線で文様を構成しており、半隆起線の接する部分に構成される三角形状の空間部を陰刻しているのが特徴的である。84～98は繩文が施文されたもの。84・85は断面方形の口縁をもつ深鉢。86はつまみ出した様な鋭い内傾する口縁が特徴的である。87は浅鉢であろう。88～94は胸部の破片であり、繩文は91以外はRL繩文である。95～98は底部。96以外は屈折底であるが、95はまだ屈折の度合が弱く丸味がある。第14図は埋壠として埋設されていた深鉢形土器である。全面にRL繩文を縦位に施文し、施文後に底部付近の繩文を部分的に横位に磨り消して、無文部としている。内外面に炭化物の付着はなく、



第15図 出土土器(6) (1/3)

底面は使用ズレしていない。口縁部は欠損しているが、欠損後の調整が認められる。内面は横ナデされており、焼成はよい。現高28.8cm・口径21.7cm。

第10類（第13図99～102）

撚糸文を施文したもの。いずれも1段の撚紐を用いており、99は軸への紐の巻き付けが密である。

第11類（第15図103～117）

無文のもの。103は浅鉢であろう。105～107は断面方形の口縁を呈する深鉢。109・110は把手がつく。110～112は屈折した平坦な口唇をもつ特徴的な深鉢。113～116は胴部、117は屈折底の破片である。

3. 第3群土器（第15図118）

A-22から1片だけ発見された中期末葉の深鉢形土器の破片である。LR繩文施文後に降低の脇に沈線様のナゾリを加えている。白色粒子を含み灰褐色を呈す。加曾利E系の土器である。

4. 第4群土器（第15図119・120）

堀ノ内I式に相当する。119は口縁が山形に高まった部分に円孔が穿たれており、内外に1ヶ所づつ無通孔が穿たれている。120は大波状の口縁を呈する深鉢の波頂部である。口唇部には二条の沈線がめぐり、波頂部には突起が設けられている。突起は内側を向いて勾玉状に構成されており、浅い円孔と沈線が施文されている。また、中央部から背面にかけては円孔が斜に貫通している。口縁下は無文である。胎土には比較的大きい白色粒子を多く含んでおり、色調は黒褐色を呈す。

第2節 石器

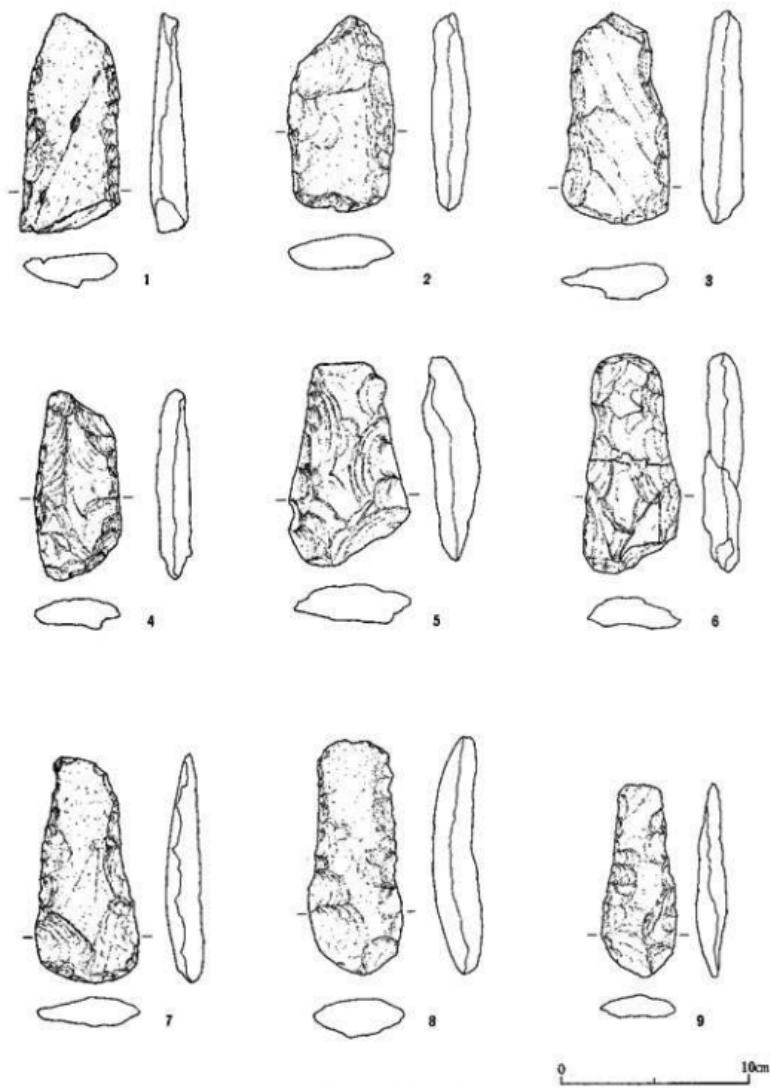
調査区より出土した石器類は、打製石斧14点・礫器1点・局部磨製石斧1点・横刃形石器1点・凹石2点・石皿1点・石鎌2点・石錐1点・両極打法に依る石器2点・木製品2点・黒耀石碎片25点であった。

1. 打製石斧（第16図1～9、第17図1～5、図版第8-1～12、図版9-1～2）

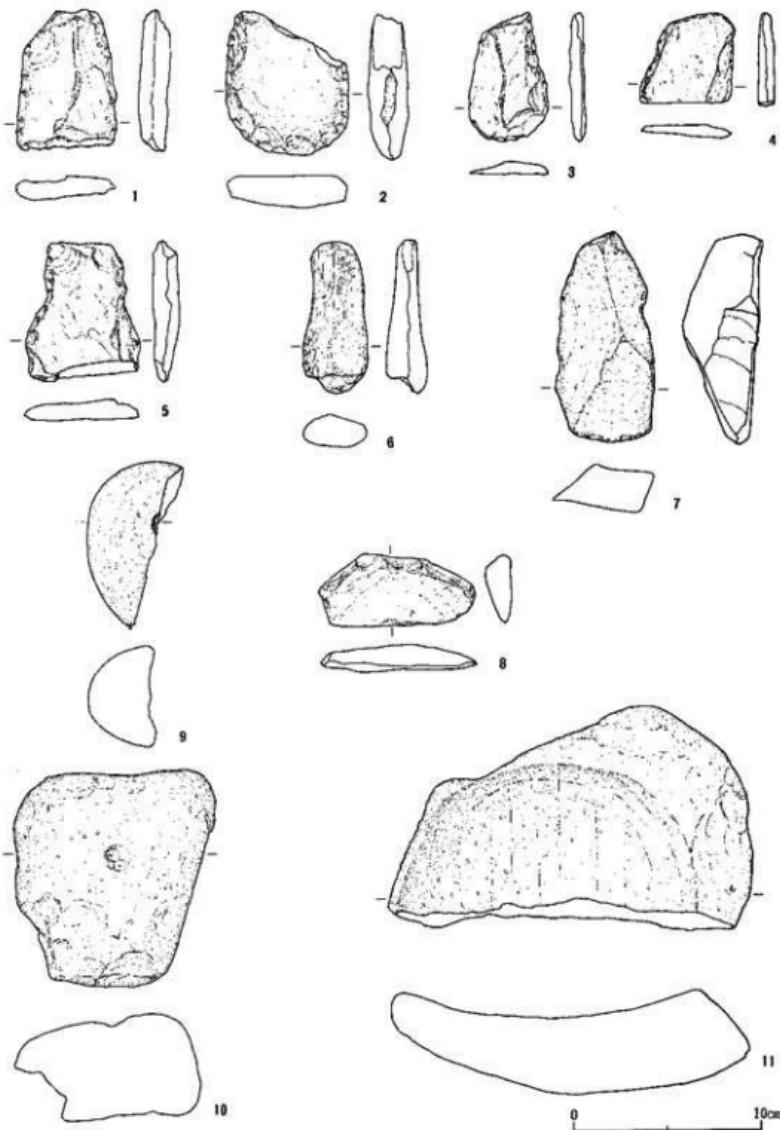
打製石斧は14点出土しており、石器全体の21.9%を占める。尚、それらは平面形状によりI類～II類に分類される。

I類（第16図1～4、第17図1・2）

I類は両側縁が平行で平面形状が短冊形を基本とするものである。これには、刃部が若干広



第16圖 出土石器(1) (1/3)



第17図 出土石器(2) (1/3)

まるもの（第16図1・3），刃部の肩部の一部が丸味を持ち外湾するもの（第16図4），胴部の中程が張るもの（第16図2）がある。第16図1は刃部を欠損する。砂岩製で器面に躰面を残す。厚さは、刃部になるにつれ厚さを増す。第16図2は砂岩製で器面に躰面を残す。厚さは一様で、裏面は平坦に仕上げられている。尚、基部は斜状を呈している。第16図3は、側縁上部にわずかな抉りを持つ。平面形状はII類に近い様相を示す。第16図4は刃部が斜状を呈するもので基部も斜状を呈する。第17図1は結晶片岩製で、器面と基部の一部に節理面を残し、刃部を欠損している。側縁部はほぼ平行である。全体的に厚さは一定で、平坦になっている。第17図2は砂岩製で、器面と側縁の一部に躰面を残し、上半部を欠損する。

II類（第16図5～9、第17図3～5）

II類は両側縁が基部より刃部へ開き、側縁が八字状を呈するもので、平面形状が撥形を基本とするものである。これには刃部の肩部が丸味を持ち外湾するものが主である。第16図5は砂岩製で器面に躰面を残す。刃部の一部を欠損する。全体的に躰面を利用した湾曲を持つ。第16図6は粘板岩製で器面の一部に節理面を残し、その部分が高く残る。刃部の一部を欠損する。基部の肩は若干の丸味を持つ。第16図7は砂岩製で器面に躰面を残す。厚さは刃部になるにつれ厚さを増し若干湾曲する。第16図8は砂岩製で器面に躰面を残す。厚さはほぼ一定であるが全体的に湾曲する。第16図9は砂岩製で器面に躰面を残し、刃部部分が若干湾曲する。厚さは基部・刃部が薄く仕上げられている。第17図3は結晶片岩製で器面に節理面を残す。基部を欠損しており、又、裏面が節理状に剥げた状態である。側縁部は八字状をなす。第17図4は結晶片岩製で節理によった剝片を利用して全体的に平坦な薄手のものである。刃部を欠損している。第17図5は結晶片岩製で表裏に節理面を残す。刃部の一部を欠損する。胴部にわずかな抉りを持ち、刃部に至るにつれ肩部が張る。

2. 局部磨製石斧（第17図6、図版9-3）

輝緑凝灰岩製で刃部を欠損する。厚さは刃部になるにつれ厚さを増す。基部は丸味を持ち敲打痕が認められる。基部に近い側縁にはゆるやかな抉りがみられ、平面形状は撥形に近い形を呈するものと思われる。磨製の状態は器面剝離後全体に、磨きをかけているが、剝離の全てにまでは及んでいない。

3. 磨器（第17図7、図版9-4）

石英閃緑岩製の縱長の躰を素材としている。刃部は素材短辺の鋸い縁辺に若干の調整を加えただけの簡単なものである。基部に敲打痕が認められる。側縁は素材のままで一方が鋭く、一方には刃部側より截断した様な剝離痕が残る。刃部は片刃で、縁辺がつぶれた状態を示している。

4. 横刃形石器（第17図8、図版9-5）

粘板岩の横剥ぎの剥片を素材としており裏面に主要剝離面を残す。刃部は直線をなし剥片の鋭い縁辺を利用して、それに若干の調整剝離を加えている。断面形は楔形に近い形を呈している。

5. 凹石（第17図9・10、図版9-6・7）

凹石は2点出土し、いずれも欠損品である。この数は他の縄文中期の遺跡と比較して少ないと言える。

9は安山岩の礫を使用している。全体のほぼ2分の1を欠損している。尚、推定の平面形状は梢円形を呈するものと思われる。凹部は欠損部に位置していた為に詳細については不明だが、残在する一部の凹をみる限りでは平面形が円形で断面がU字状を呈するものと思われる。10は安山岩の礫を使用している。平面形状は、ほぼ台形状を呈し、下面には剝離痕と思われるものが数ヶ所みられる。凹部は平面円形で深さは比較的浅い。

6. 石皿（第17図11、図版9-8）

角閃石安山岩製で全面風化作用を受け磨滅の状態等細部観察はできなかった。全体のほぼ3分の2を欠損している。凹みは浅い。縁部は一部狭く、凹みは片寄った個所に位置する。

7. 石鎌（第18図1～3）

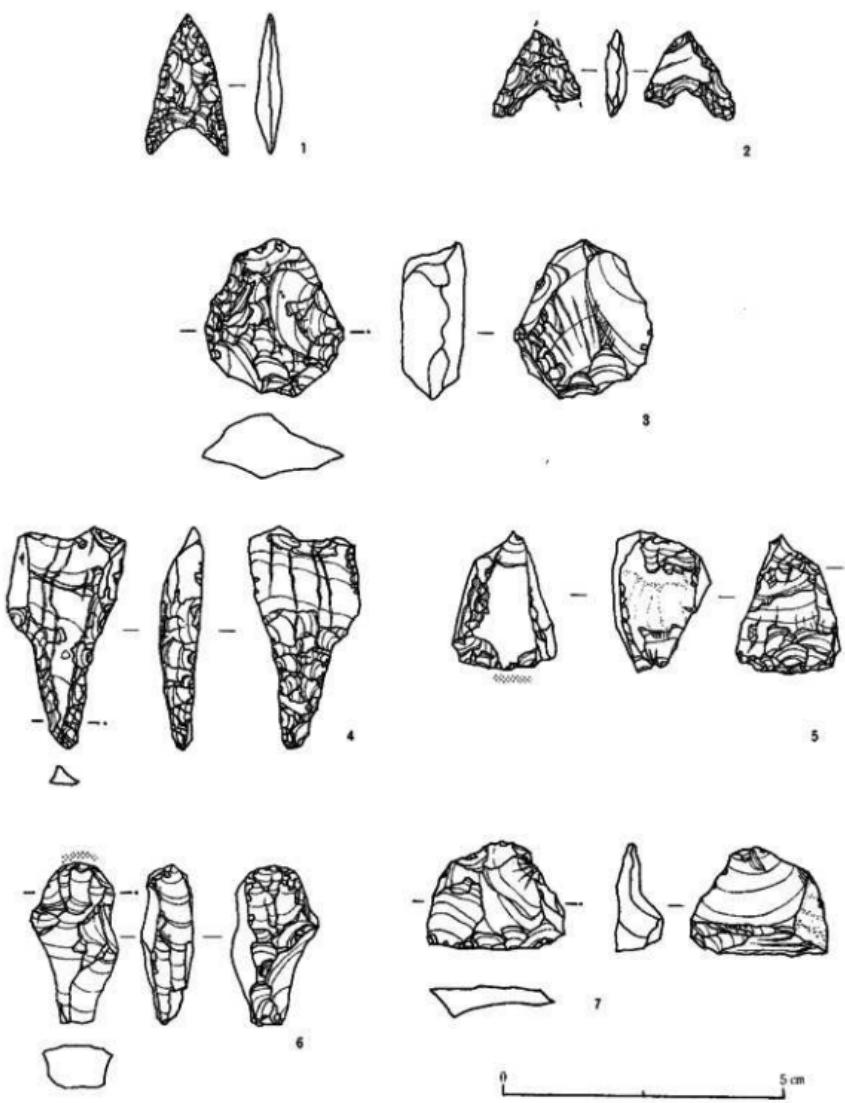
3点出土しており、内1点は未製品である。1は黒耀石の剥片を素材とする。調整は全面に及び、若干湾曲する側縁を持つ。身の部分は長く基部の抉り込みは丸味をもつ。2は黒耀石の剥片を素材とし、一部に自然面が残存する。先端部と脚部を欠損する。調整は裏面に自然面を残すだけで、表面は調整が全面に及んでいる。側縁は若干湾曲する。脚部は広がる傾向を示す基部の抉り込みは割合深く丸味をもつ。3は石鎌の未製品と思われるもので黒耀石粒を素材としている。調整は側縁部を中心に行われ、その結果側縁は薄くなっている。先端部と基部については調整作業が行われていない。

8. 石錐（第18図4）

黒耀石の縱長の剥片を素材とする。調整は素材剥片の側縁を刃溝し調整により先端部を作り出している。先端の断面形は三角形を呈しており、先端部側縁は使用の為か稜線が磨痕状をなす。

9. 両極打法による石器（第18図5、6）

所謂両極打法と呼ばれる台石とハンマーストーンにより加撃され製作された石器をさし、ビエスニエスキュー・曾根型彫刻器・曾根型石核などと呼ばれている石器である。本遺跡からは



第18図 出土石器(3) (1/1)

2点出土した。2点共に黒耀石を素材としている。

5は黒耀石粒を素材としており、総ての面に自然面を残す。厚さは部厚くゴロゴロしたものである。打面は粒の上部よりと、それより90°移転した側面の稜部にみられる。刃部と思われる位置は、所謂階段状の剥離痕が幾重にも重なった状態で厚くなっている。側面形は楔形を呈し、この石器の機能を示唆している様に思われる。6は黒耀石粒を素材としている。厚さは厚く断面形は紡錘形に近い形を呈している。打面は素材の短辺に有り、上下より両極打法によると思われる特徴的な剝離が生じている。側面には所謂截断面と思われるものがみられ、その縁辺に刃こぼれ状の剥離痕を生じている。

この様な石器は縄文時代全般を通してみられる様であり、縄文中期に於いては神奈川県尾崎遺跡等に於いて報告されている。尚、今回出土した資料には若干の形状等の差異がみられ、今後こうした石器が新たに認識されるに従い分類されうる可能性を持っている。

10. 調整痕をもつ剝片（第18図7）

黒耀石の粒を素材としており一部に自然面を有する。調整は素材の右側、下部に集中してみられる。尚、それらの調整は刃部等の調整ではなく、むしろ整形調整に近いものである。背面にはポジティブなバルブを残す。この他に縁辺に、リタッチ状の剥離がみられるものが4点ある。總て黒耀石剝片で、最大長4.5cm、最大幅3.6cmの範囲内に包括されるものである。尚、剝片の剥離状態はさまざまで一定した傾向はみられず不定形のものが主である。リタッチの位置は、剝片側縁のもの1点、剝片の末端のものは3点である。リタッチの長さは1.3cm以内で比較的短かく、その状態も割合丹念ではない。このような調整は剝片の一部分に短かい範囲に渡ってみられるため刃部として捉えるには若干の問題があるよう思われる。この他にも剝片の縁辺に刃こぼれ状の痕跡を残すものもあるが、その状態はきわめて貧弱である。ここに述べたリタッチ、刃こぼれを持つ剝片は所謂剝片石器に比べ刃部のあり方等が不明確である。今後こうした縄文中期に於ける剝片のあり方にについて詳細なみかたを必要とし、所謂剝片石器についてある程度の概念規定が必要となるであろう。

註(1) 岡村道雄 1976 「ビエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』東出版事業社

(2) 鈴木次郎・岡本季之・河野喜映 1977 「尾崎遺跡」神奈川県教育委員会

第1表 出土石器一覧表〔単位cmおよびg, () 内は現存値〕

擲番	図号	No.	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
第16図	1	A-21	打製石斧	(11.0)	(6.2)	(2.6)	(11.3)	砂岩		刃部欠損
	2	D-9	"	10.6	5.5	2.0	131	"		
	3	A-30	"	11.4	5.7	2.1	169	粘板岩		
	4	A-20	"	10.2	4.5	1.8	101	変輝緑岩		
	5	A-26	"	11.0	(6.2)	2.6	(160)	砂岩	刃部欠損	
	6	B-20	"	11.7	(5.0)	1.9	(155)	粘板岩	刃部欠損	
	7	A-22	"	12.3	5.4	1.8	128	砂岩		
	8	B-18	"	12.8	4.9	2.3	159	"		
	9	B-17	"	10.5	4.0	1.6	56	"		
第17図	1	B-18	"	(7.6)	(5.2)	(1.6)	(82)	結晶片岩	刃部欠損	
	2	A-28	"	(7.7)	6.4	2.1	(122)	砂岩	基部欠損	
	3	表 探	"	(7.0)	4.3	0.8	(25)	結晶片岩	基部・裏面欠損	
	4	D-9	"	(5.0)	(4.9)	(0.9)	(26)	"	刃部欠損	
	5	A-30	"	(7.6)	6.0	1.5	(66)	"	刃部欠損	
	6	B-18	局部磨製石斧	(8.2)	(3.4)	(2.2)	(69)	輝綠凝灰岩	刃部欠損	
	7	A-26	砾器	11.2	5.3	4.1	238	石英閃綠岩	(捕獲岩)	
	8	A-28	横刃形石器	3.9	8.2	1.4	48	粘板岩		
	9	A-22	凹石	(8.9)	(3.8)	(5.4)	(207)	安山岩	1/2欠損	
第18図	10	C-3	"	11.4	10.7	5.4	892	"	裏面一部欠損	
	11	B-20	石皿	(19.3)	(11.6)	(4.8)	1317	角閃石安山岩	2/3欠損	
	1	A-22	石鏃	2.5	1.4	0.5	0.9	黒耀石		
	2	D-9	"	(1.6)	1.5	0.4	(0.7)	"	先端・脚部欠損	
	3	D-9	石鏃未製品	2.8	2.5	1.1	5.5	"		
	4	D-9	石錐	4.0	1.9	0.7	4.0	"		
	5	B-20	両面打法による石器	2.5	1.9	1.8	6.0	"		
	6	B-18	"	2.9	1.4	0.8	2.5	"		
	7	B-20	調整痕をもつ剝片	2.0	1.9	0.8	3.0	"		

第VI章 調査の成果と課題

第1節 新水掛遺跡出土の打製石斧について

調査区より出土した打製石斧について、1・自然面の状態と湾曲の状態、2・側縁部と刃部の「つぶれ」「すれ」の状態、3・遺存状態についての3項目について検討してみた。全体的に14点と打製石斧の点数は少なく統計処理上危険ではあるが、あえて分析を行うことにする。尚、1と2項目については、遺存度の高い資料を中心に行うこととする。

1. 自然面の状態と湾曲の状態について

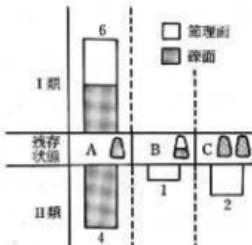
14点の資料中自然面(縫面・節理面)は全てにみられ、両面に有るものが2点、残る11点(他1点は裏面欠損のため観察ができなかった)は片面に残っている。自然面の残存位置は次の様に分類できる。

- A. 片面統て若しくは大部分に自残面を残す。
- B. 片面刃部若しくはその周辺に自然面を残す。
- C. 両面に自然面を残す。

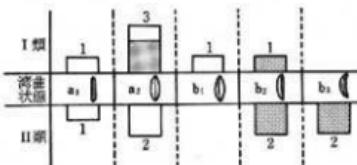
以上の様な状況が観察できる。これを平面形状別にみた場合第19図の様になり、I類II類共にAの状態に集中する傾向がみられる。湾曲の状態については、打製石斧の側面観より次の様に分類することが可能である。

- a: 側面が平面で稜線は直線をなす。
- a₂: 側面が凸レンズ状を呈し稜線は直線をなす。
- b₁: 側面が凸レンズ状を呈し稜線は曲線をなす。
- b₂: 側面がカマボコ状を呈し稜線は直線か曲線をなす。
- b₃: 側面・稜線共に曲線をなす。

これを平面形状別にみた場合第20図の様になり、I類とII類の間には若干の差が認められる。特に湾曲を持つものについてはII類が多い。次に、湾曲と自然面の相互関係をみた場合第21図の様になる。その中で側面形がカ



第19図 平面形状と自然面残存状態の相関図



第20図 平面形状と湾曲の相関図

高さ	a ₁	a ₂	b ₁	b ₂	b ₃
自然面	○	○○●○	●●●●		
A	○				
B	○				
C	○	○			

○ 斜面
● 薄面

第21図 自然面と湾曲の相関図

マボコ状及び湾曲を示すものは、片面を自然面、特に縦面におおわれているものが総てで、円錐から得られた剥片を素材としていることを示している。湾曲と自然面、特に縦面との関係について製作の意識の中に、そうしたものが存在していたようと思われる。以上、自然面の位置と側面の湾曲についてみてきたが、これらの相互関係は使用等と密接な関連があると思われる。

2. 側縁部と刃部の「つぶれ」「すれ」の状態について

打製石斧の側縁部の棱線には「つぶれ」た状態がみられる。「つぶれ」た状態の多くは側縁部、上部の抉り込み部分及び肉厚な部分にみられる。このことは、「つぶれ」が打製石斧の素材となる剥片の整形調整、厚味調整に関連が有った事を示している。「すれ」については刃部を中心とした部分にみられる事が多く、その範囲は側面の稜線のみに限らず打製石斧器面の剥離面稜部にもみられる。この様な「すれ」が何に依り生じたのかについては、「使用に依る磨耗痕と思われるもの」「製作中に依るもの」「その他の要因に依るもの」などが考えられる。観察した限りで、この「すれ」は刃部を中心とした範囲にみられること、また器面部の「すれ」は器面剥離後に生じている点などより考えて、「使用に依る磨耗痕と思われるもの」に属すると言えよう。この器面に残された「すれ」に微視的な観察を加えると、所謂線状痕等も観察できるのではないだろうか。

3. 打製石斧の遺存状態について

今回の調査によって14点出土した打製石斧の内7点は何等かの形で欠損している。これらの資料を遺存状態について分類すると次の様になる。

1. 完形品 - 7点
2. ほぼ中間で折れ下半部を遺存するもの - 1点
- 2'. ほぼ中間で折れ上半部を遺存するもの - 1点
3. 刃部を欠損するもの - 5点

これによると完形品が全体の50%を占め最も多い。次に刃部を欠損するものであるが、この欠損状態については刃部の全てを欠損するものと、刃部の一部を欠損するものとに分かれ、前者は2'に近いものも含まれる。この様な打製石斧の欠損原因是、「使用時に於ける偶発的要因に依るもの」「人為的に壊したもの」「その他の要因に依るもの」等が考えられる。しかし、本遺跡よりの資料が、どの原因に依るものかは不明である。

4. まとめ

本遺跡に於いて出土した打製石斧は14点と他の縄文中期の遺跡に比較した際その数は少ないと言えよう。この資料に対して残された痕跡より分析を加えてきたが、それらの分析より以下の事が看取できる。

- 1) 本遺跡の打製石斧について、その平面形状は2種類に分類が可能であり、従来よりの三基本形（短圓形・撥形・分綱形）の内短圓形・撥形のものが存在した。
- 2) 全ての打製石斧の器面に何らかの形で自然面が残存し、その自然面のあり方と側面湾曲の状態の間には何らかの関連性が予測できる。
- 3) 側縁部にみられる「つぶれ」は打製石斧整形調整とかかわりが有ると考えられる。尚、「すれ」については、使用痕として捉える事が可能なものであり、刃部を中心とした範囲にそれらは集中する傾向を示す。
- 4) 打製石斧の欠損については、その多くが刃部を中心とした範囲を欠損するものが主体で想像するならば使用中に刃部を欠損し、遺存部を廃棄したためにこの様な状況が生じたと想像できよう。

以上が打製石斧の分析の結果であるが、その結果は従来先学により述べられて來た結果と同じじで、本遺跡よりの資料は、縄文中期にみられる普遍的な打製石斧のあり方として捉える事ができよう。

第2節 新水掛遺跡の素描

1.

八ヶ岳西南麓の諸遺跡のあり方が主要なテーマとなって、縄文時代中期の集落論や領域論が発展してきたことは1つの学史的事実である。そのなかにあって、尖石・与助尾根を中心とする西山麓での諸遺跡のはたした役割も大きい。勿論、今後もそうした学史を踏まえての論が展開されることは想像に難くないところである。その場合、学史的に著名な遺跡の周辺に所在する同時代の遺跡が常に問題となることは明らかである。新水掛遺跡もその1つであり、事実尖石・与助尾根を主要テーマとした諸論のなかで問題とされたこともあった。しかし発掘調査のなされた遺跡ではないため、遺跡のあり方についてはほとんどが想像の域を出ないものであった。したがって今回の発掘調査により、ほとんど白紙の状態にあった新水掛遺跡について、発掘された事實を基に、ごくわずかではあるが発言を加えられることとなった。そこで以下に発見された遺構等について若干の考察を加え、新水掛遺跡のあり方を推定し、素描することで

将来の調査に備えようと思う。

2.

新水掛遺跡の占地する台地は東西に長い帯状台地であり、台地の規模は北に隣接する尖石・与助尾根・与助尾根南の台地と同様にかなり大きい。台地の南側は緩やかな斜面であり、北側は急峻な地形となっている。台地は谷状の地形をはさんで北側に尖石・与助尾根・与助尾根南の台地、南側に同時代の鶴田遺跡の小台地と金掘場遺跡の台地と対峙した位置にある。遺跡はこの台地の南緩斜面を中心広がっているものと考えられる。

発掘区は、この帯状台地がわずかに括れる南北幅275mほどの台地の中央部に、台地の長軸線に沿った形で設けられている。ちょうど台地中央部に、恰も長い試掘溝を入れた格好である。遺構はこの160mの発掘区間のほぼ中央部に発見されたのみであり、他の発掘区内からはまったく発見されなかった。また、かつて宮坂英式氏によって住居址と考えられる土層中より採集された土偶⁽¹⁾は、この遺構付近から西へ200mほど離れた台地中央部の地点であるらしい。

3.

発見された遺構のうちビット群には2種が認められた。1つは弧状に展開する柱穴様のビットとそれに関連するビット群であり、もう一方はやや大型の平面形が椭円形を呈するもので、土塙として扱われるものに類似する形態をもつものであった。前者は、今回の発掘区内でみる限りでは堅穴住居の柱穴とは思われないものの、その配列状態や個々の形態からみて、またさらに発掘区域の北側に統くと考えられることからも、やはりこれは何等かの施設の柱穴と考えてよいであろう。その施設が何であるかについては残された部分についての将来の調査にまたなくてはならないものの、前記した若干の所見を基に想像を逞しくすれば、堅穴住居とは異なる特殊な施設も考えられる。ともかくこれ等の遺構の背後には何等かの特異な行為の存在を考えないわけには行かないだろう。

一方の土塙状のビットについてもその性格の多くについては不明な部分が多い。しかし土器を有したP₁について言えば、同時代の集落遺跡でしばしばみられる、一括土器や完形土器を有する土塙と類似する点を指摘できる。したがって、P₁もそれらの遺構の性格の内で理解され得

-
- (1) a 宮坂英式 1937「信濃国諏訪郡上場沢の遺跡」『中部考古学会彙報』第2年第6報
b 宮坂英式 1938「八ヶ岳山麓諏訪郡新水掛遺跡出土第2号土偶報告」『ひだびと』第6年第11号
c 宮坂英式 1939「八ヶ岳山麓新水掛遺跡発掘第3号土偶の報告」『ひだびと』第7年第1号

る遺構だと言えるだろう。

P_iと柱穴様のビットとの関係は、P_i内にある斜傾した柱穴様ビットとの切り合からみて、向者は同一時期のものとは思われない。しかし出土土器や埋甕からみても、柱穴様ビットはP_iと同様に中期中葉の遺構と考えられ、P_iと柱穴様ビット群とはかなり近接した時期のものと考えられるのである。

4.

第Ⅳ章第1節で記したとおり、住居址に付属する壁や周溝、床面や炉址等の施設が発見されなかったことから、ビット群は竪穴住居址に付属する施設とは考えられなかった。そして、発見されているこれらのビット群の状態からみても、埋甕周辺には住居址の出入口部は想定できない。このため、埋甕もビット群と同様に住居址に付属する施設としてはとらえられないであり、埋甕は藤内I式期の屋外埋甕として理解した。

埋甕はビット群の中心部から外れてはいるものの、弧状に展開するビット群と共に遺跡の空白地帯から一線を画していること等からみて、この埋甕はビット群と強く関係した施設であったと考えられるのである。

ところで、ビット群が発見された当初、ビット群のあり方とP_i内の土器や他の出土土器からみて、中期中葉の住居址の存在を想定して作業を進めたことは第VI章で記したとおりである。このため、住居址に付属するビット以外の施設が何等発見されないので、想定していた住居址と近い時期の埋甕がビット群に接つて発見されるなどとはまったく予想外の出来事であった。なぜなら、同期の埋甕の発見については、八ヶ岳西南麓も含め、あまりその発見例を寡聞にして聞き及ばないからであった。例えば、神村透氏が昭和48年の段階で集成された南信地方の住居内埋甕の集成表を基に勝坂期のものを再検討しても、住居出入口部に埋設された埋甕の確実な例は伊那村遺跡丸山地区第8号住居址のみであり、他には諏訪市荒神山遺跡第80号住居址が管見にふれた程度である。両者は共に井戸尻III式期か、あるいは曾利I式期には入るかと思われる中期中葉終末のものであり、本例は以上の2例とは時間的にかなりの隔たりがある。埋甕が屋外から屋内へととり込まれた経緯については既に山本暉久氏の論じたところであるが、

(1) 神村 透 1973「南信地方の埋甕について」『長野県考古学学会誌』第15号

(2) 河西清光・他 1952「長野県上伊那郡伊那村遺跡第2次調査概報」『信濃』第4卷第11号

(3) 岡田正彦・他 1975「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市・その3-1『長野県教育委員会

(4) 山本暉久 1977「繩文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について(一)・(二)」『信濃』第29卷第11号・第12号

住居出入部の埋甕として埋設されるようになったのは、以上の2遺跡の例からみても、おそらく中期中葉勝坂期の後半であろう。したがって、それ以前の埋甕については一応屋外の埋甕としてか、あるいは屋内でも住居出入部以外の埋甕として検討してみる必要がある。本遺跡の埋甕は、発掘時の所見による限りでは住居址に伴うものとは思われなかったことから、前述したとおり屋外の埋甕施設と考えられるのである。

ここで想起されるのは、本遺跡と同じ八ヶ岳西南麓に所在する同時代の藤内特殊遺構と、やはり同時代の山梨県塩山市に所在する柳田遺跡の存在である。両者は共に勝坂期の特殊遺構が一定のまとまりをもって発見された遺跡として著名であり、この特殊遺構内からは埋設土器も数個体発見されている。

両遺跡のうち藤内特殊遺構は土器群を中心とする7つのグループから構成されている。そのうち第1グループと第3グループから第6グループまでに埋甕施設が発見されている。すなわち、第1グループでは「土器が三個体分、軟質ローム中に小さな穴を掘って埋められ」ており、第3グループでは3ヶ所から土器が出土し、そのうち4個が埋められている。その中の1つは「硬質ロームに通ずる穴が掘られて埋められ」しており、もう1つ「埋め立てられ」たものがある。第4グループでは「有孔鉢付土器が埋め立てられて」おり、第5グループでも4個体のうち「2個は埋め立てられて」おり、第6グループでも4個体のうち「2個体は埋め立てられて」いた。調査者の武藤雄六氏はこの藤内特殊遺構の性格について、「いまだだにその帰趣を明らかにすることは困難である」としながらも、一応、祭祀址や墳墓様遺構も性格の1つとして考えている。

一方の柳田遺跡においてもAトレンチから2体の埋設土器が発見されている。それは1号と13号土器であり、両者は共に「垂直に立てて埋置され」ていた。詳しい図は示されていないが、図版と記述から判断して、両者は屋外の埋甕施設と考えられよう。この埋甕は共に本例と同じ藤内I式期の深鉢形土器であった。柳田遺跡はごく狭い範囲に以上の施設も含め特殊な遺構群が発見されており、調査者の上川名昭氏は、以上の埋甕施設を含めたこの柳田遺跡について、「決め手はないのであるが墓地説をとった方が適切と考え」ている。

以上のように、藤内特殊遺構の埋設されていた土器群や柳田遺跡Aトレンチ1号・13号土器と本遺跡の埋甕とは同一時期のものであり、三者には類似点が多い。藤内特殊遺構では土器の埋設方法が判る図は示されていないが、記述によって大略を知ることができる。それによると、

註(1) 武藤雄六 1965「藤内特殊遺構」「井戸川」中央公論美術出版

(2) 上川名昭 1971「甲斐北原・柳田遺跡の研究」巖南堂書店

第1グループの「軟質ローム中に小さな穴を掘って埋め」ているものと、第3グループの「硬質ロームに達する穴が掘られて埋められ」ていたものの2例は、共に本遺跡の埋甕の埋設方法と同様である。したがって本遺跡の埋甕も屋内のものとは異なり、藤内特殊遺構の埋設された土器群や柳田遺跡の埋置されていた土器等と同じように、屋外の埋甕施設として理解されるのである。

これで市域での勝坂期の屋外埋甕は本例を加えて2例となった。先の例は猪沢式の深鉢形土器を埋設していた中ッ原遺跡である。⁽¹⁾ 中ッ原遺跡は新水掛遺跡から直線距離にして北西へ約2.5kmの位置にあり、湖東地区内に所在する中期の集落としてはかなり規模の大きな遺跡とみられ、「八ヶ岳西山麓の中期遺跡の有する性格を示し、集落構成を完明することのできる重要な遺跡」と考えられている。屋外埋甕が共に一基発見された遺跡ではあるが、同期の遺跡の規模等の面で共通したものがあり、興味深い2遺跡である。

5.

出土した土器のうち中期のものは第2群と第3群である。第2群は中期中葉の猪沢式の新しい部分から井戸戸式の前半に及ぶものであり、量的には藤内期のものが多い。一方第3群とした中期末葉の土器片は1片だけ出土したのみであった。表面採集で中期後半の資料が今回の発掘区より東北部で得られていることからみると、どうやら集落の設けられている位置が勝坂期と加曾利E期とでは異なるものと予測される。このことは、隣接する尖石遺跡での両期の集落のあり方と同様である可能性が強いのであり、新水掛遺跡の面的な広がりの大きさを窺わせる。また、量的には少いものの、第4群とした後期初頭の土器が出土したことは、新水掛遺跡が中期からさらには後期へと及ぶ遺跡であることを物語っており、推定される遺跡の広さと共に、重層性の複雑な遺跡であることも知られるのである。

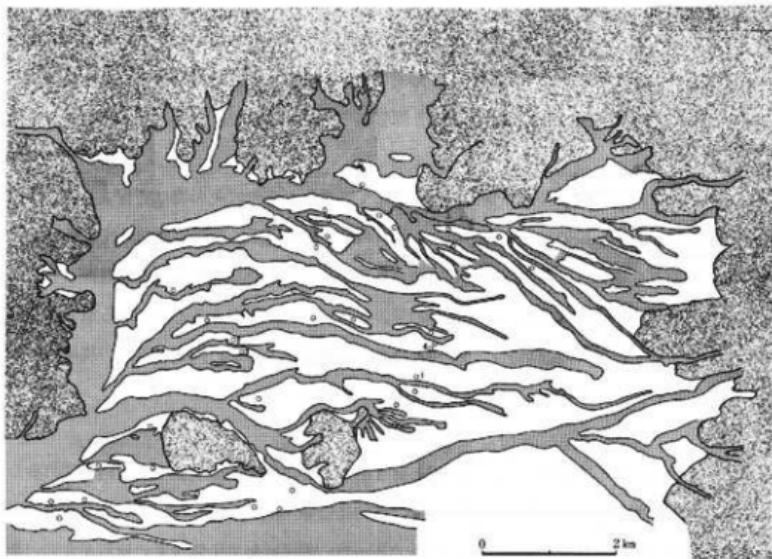
6.

遺跡の立地する部分は帯状台地が若干掘れた地形をなしている。このように、長い帯状台地においては地形的に変化のある部分に集落が占地する例が多い。このことは、隣接する尖石をみるとまでもなく、規模の大きな台地を占地する大型集落の選地条件の一つであったと考えられる。新水掛遺跡が占地するこの台地内での同時代の集落遺跡には、新水掛遺跡より下方に2.5kmの距離を保って存在する日向遺跡と塩之日尻遺跡がある。台地はこれらの遺跡よりもさらに西へ

註(1) 宮坂虎次 1974 「中ッ原遺跡」「中ッ原・和田遺跡」 茅野市教育委員会

(2) 制原 健 1964 「南信、八ヶ岳山麓における繩文中期の集落構造」『古代学研究』第38号

(3) 宮坂英式 1966 「豊平の原始文化」『豊平村誌』豊平村誌編纂委員会



第22図 八ヶ岳西山麓の地形と中期後半の遺跡 1.新水掛 2.日向上 3.塩之目尻 4.尖石

2 kmほど続くものの、この2遺跡より下方には遺跡は存在せず、台地は大きな空白地帯となっている。一方、新水掛遺跡より上方にも同時代の遺跡は存在せず、新水掛けの台地は3 kmほど上方での標高1200m辺り尖石・与助尾根の台地等他の台地と合体し、広見原を構成している。すなわち、新水掛けの台地においても同時代の集落が1つの台地に対して無計画に営まれたのではなく、一定の空間を保ちつつ、同一台地内で計画的に営まれていたことが理解される。¹¹⁾また、新水掛け遺跡は尖石遺跡と同様な同一台地内の地理的位置に集落を構えており、無遺跡地帯に対しての同一台地内での日向上・塩之目尻遺跡との関係を窺うことができる。この3遺跡は共に勝坂期から加曾利E期に及ぶ集落遺跡なのである。しかし残念ながら今回の調査では加曾利E期の遺構は発見されなかった。したがって、以下には発見された遺構から予想される勝坂期の集落についての若干の見解を記しておこう。

発見された遺構はいずれも特異な行為を背景にもつと考えられるることは前記のとおりである。殊に埋甕の存在は、本遺跡と同じ八ヶ岳西南麓に所在する同期の藤内特殊遺構や、山梨県塩山

註(1) 鵜飼幸雄 1981「八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の領域について」『信濃』第33巻第



第23図 藤内遺跡の集落のあり方と特殊遺構の位置 宮坂・他1965より

市の柳田遺跡にその性格の類例を見い出せるのである。殊に藤内遺跡においては特殊遺構が帯状台地の基部を馬蹄形にとり巻く集落遺跡の中央部に設けられており、特殊遺構を集落構造の内で理解することができる。この特殊遺構は7つのグループから成り、約15m四方の広さをもっている。遺構の特殊性と中央広場の故もあり、この遺構の周辺には住居址の存在が確認されていない。翻って本遺跡はどうだろうか。前述したとおり、A-19・20・21に埋甕とピット群が集中して発見された以外は、160mの長い発掘区間内からは遺構はなにも発見されなかった。

しかし遺物は平均して各グリッドより出土している。この発掘区の設定された位置は台地の中央部であった。集落の主体は南の緩斜面にあると考えられるし、中期の馬蹄形集落や環状集落の群別構造、それに隣接する尖石遺跡での集落のあり方を考慮すると、台地の中央部はどうやら同期の集落の中央部と考えられる。藤内遺跡では集落が台地の基部に構えられており、一方本遺跡は藤内遺跡の占地する台地と同様の帯状台地が若干括れた位置に集落が設けられている。つまり両者は占地の上で類似しているのである。また、本遺跡も藤内遺跡と同様に、台地の規模や遺物の散布状態からみて、中期中葉においては環状集落を構成するものと推定される。今回の発掘区はその中央部に位置していると考えられるのである。このようにみてくると、今回発見された遺構の集落内での位置は、藤内遺跡の特殊遺構の集落内での位置と類似していることも指摘できる。発見されたピット群や埋甕は、殊にピット群は発掘区の北側へ続くと考えられるし、埋甕は藤内特殊遺構が15m四方の広がりをもっていることからしても、他の遺構と共にさらにいくつかが存在するとも考えられる。このような遺構をもった集落は八ヶ岳西南麓でもそれほど多く存在するとは考えられない。藤内特殊遺構の性格が必ずしも明らかでなかったり、柳田遺跡の性格づけに決め手がない現在、また、こうした遺構を有する遺跡がそれほど多いとは考えられないだけに、このような遺構を有する可能性の高い本遺跡の存在は重要である。一方、勝坂期と加曾利E期では、尖石遺跡と同じように集落の設けられた位置が異なるようである。加曾利E期の集落はさらに東側に考えられるし、発見された遺構付近から西へ200mほ

(1) 宮坂英一・武藤雄六・小平辰夫 1965 「鳥帽子・藤内遺跡」『井戸尻』中央公論美術出版

(2) 長崎元広 1977 「中部地方の縄文時代集落」『考古学研究』第23卷第4号

ど離れた地点で土偶が採集されていること等からみても、遺跡はかなり広い範囲に及ぶものと考えられ、ここにおいても新水掛遺跡の重要性が認識されるのである。

7.

以上、わずかな発掘で得られたわずかな事実を基に、想像を膨らませすぎたきらいはあるが一応考えられることを記してきた。尖石・与助尾根を中心とする集落・領域論は主に加曾利中期に特定されてきたため、その意味では当初に記した隣接集落である本遺跡を含めての集落論・領域論の展開に寄与する直接的な資料が得られず、新水掛遺跡についてのこの問題はまたしても将来の調査に委ねられることとなった。このことは、今回のわずかな発掘で膨らませすぎた中期中葉の新水掛集落のあり方について、その想像の域を脱った実証的集落論が展開されることも含め、将来の調査に共々期すところである。

第VII章 結語

かつて一面の桑畠であった新水掛遺跡は、今は大根・キャベツ等の高原野菜や花卉の畠となり、農家の生産活動の変貌を如実に物語っている。道から南側は林、北側は畠、正面には八ヶ岳が連なり聳える景観はむかしと変わることはない。道路が拡幅され、砂利が敷かれた以外は、茅野市でも現状変更の少ない遺跡の一つである。

今回の発掘は道路添いというごく限られた部分であったため、遺跡の規模・性格等の究明は充分とはいえない。しかし、全発掘区から遺物が検出され、また地元の方達からの聞き取りによる今までの遺物の出土状況から、尖石遺跡に劣らぬ大きな遺跡であることが想像される。尖石遺跡から僅か200mという至近距離に位置するこの遺跡のもつ意義は極めて大きい。周辺の与助尾根・勺助尾根南・鶴田・金槌場の諸遺跡を含めて、縄文時代中期の集落構成・集落の変遷・集落間の交流・生業空間等を包摂する問題は極めて大きく、今後の解明に残された課題である。

上部では別荘開発が行われてはいるものの、その地理的環境と、農村の基盤を支える生産の場という点から、当分は開発行為もなく、遺跡は地中に保存されるものと予想している。しかし、いったん開発行為が許されたならば、その進行はまたたく間である。このことを充分認識して、遺跡の保護活用に対処しなければならない。

今回の道路拡幅工事については、当初関係者間の若干の理解不足と、連絡の手違いがあり、長年尖石考古館の土器復元を手掛けていただいている地元の柳平嘉彦氏に知らされた。工事はすでに遺跡手前まで進んでいたが、幸い事務局のすばやい対応により、関係者の理解が得られて、急遽発掘に着手することができた。短期間で、小規模の調査ではあったが、得られたものは決して跡くない。

註 參 考 文 獻

- ウ 鶴瓶幸雄 1981「八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の領域について」『信濃』第33巻第4号
- オ 岡田正彦・他 1975「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市・
その3一』長野県教育委員会
- 岡村道雄 1976「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東出版事業社
- カ 河西清光・他 1952「長野県上伊那郡伊那村遺跡第2次調査概報」『信濃』第4巻第11号
- 上川名昭 1971「甲斐北原・御田遺跡の研究」巖南堂書店
- 神村 透 1973「南信地方の埋葬について」『長野県考古学会誌』第15号
- キ 桐原 健 1964「南信、八ヶ岳山麓における縄文中期の集落構造」『古代学研究』第38号
- ス 鈴木次郎・岡本孝之・河野喜映 1977「尾崎遺跡」神奈川県教育委員会
- ト 鳥居龍三 1924「諏訪史第1巻」信濃教育会諏訪部会
- ナ 長崎元広 1977「中部地方の縄文時代集落」『考古学研究』第23巻第4号
- 長野県考古学会 1980「宮坂英式先生年譜・著書・論文・報告等目録」『長野県考古学会誌』第
35号
- ミ 宮坂英式 1937「信濃国諏訪郡上場沢の遺跡」『中部考古学会彙報』第2年第6報
- 宮坂英式 1938「八ヶ岳山麓諏訪郡新水掛遺跡出土第2号土偶報告」『ひだびと』第6年第11号
- 宮坂英式 1939「八ヶ岳山麓新水掛遺跡発掘第3号土偶の報告」『ひだびと』第7年第1号
- 宮坂英式・武藤雄六・小平辰夫 1965「鳥帽子・藤内遺跡」「井戸尻」中央公論美術出版
- 宮坂英式 1966「豊平の原始文化」『豊平村誌』豊平村誌編纂委員会
- 宮坂虎次 1974「中ッ原遺跡」「中ッ原・和田遺跡」茅野市教育委員会
- ム 武藤雄六 1965「藤内特殊遺構」「井戸尻」中央公論美術出版
- ヤ 八幡一郎 1937「信濃国諏訪郡上場沢の土器の説明」『中部考古学会彙報』第2年第7報
- 山本暉久 1977「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について(一)・(二)」『信濃』第29巻第11
号・第12号

発掘調査関係者名簿（敬称略）

1 新水掛遺跡調査委員会

委員長 小川由加里（文化財審議委員長）
副委員長 三浦邦次（教育委員長）
委員 立木忠雄（社会文教委員長）
〃 宮沢 城（文化財審議副委員長）
〃 小平延門（尖石保存会長）
〃 木川千年（教育長）
〃 小平善幸（尖石考古館長）
〃 伊藤勝雄（建設課長）
〃 笹岡忠雄（清掃課長）
〃 牛尾忠幸（財政課長）
〃 矢島雅幸（社会教育課長）
調査員 宮坂虎次（尖石考古館）
〃 鶴飼幸雄（〃）

2 事務局

事務局長 木川千年（教育長）・事務局次長 矢島雅幸（社会教育課長）・事務局係長 永田桃介（社会教育係長）・局員 小口秀孝・植松幸子・宮坂虎次・鶴飼幸雄

3 発掘調査参加者

吉田二夫（社会教育課嘱託）・柳沢士郎（日本大学）・守矢昌文（大正大学）・柳平美春・今井洋子・今井千代子・今井ちよ・柳平秋子・宮島ゆき・柳平さち（上場沢区）・藤森和助（本町）・原田 力（荒神区）

写 真 図 版



1 新水掛遺跡の台地（尖石付近より）



2 尖石遺跡の台地（新水掛の台地より）



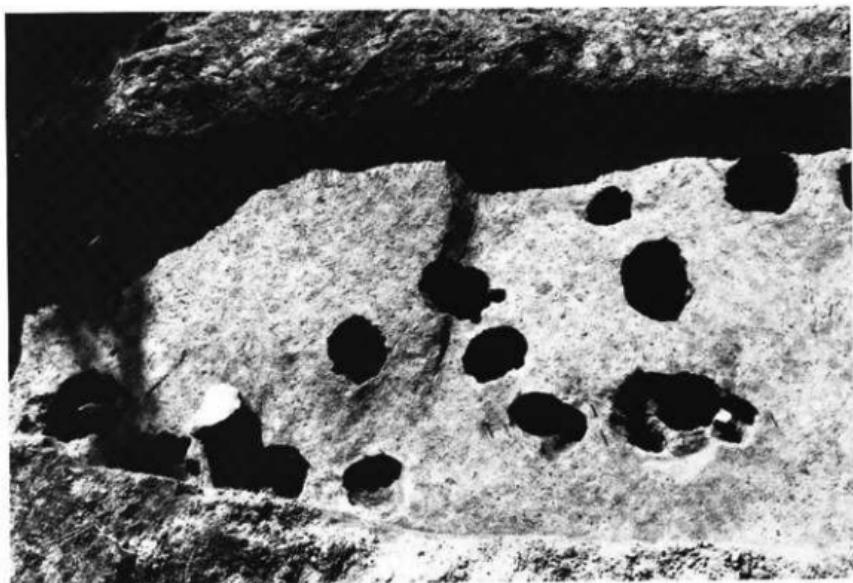
1 発掘区近景（東より）



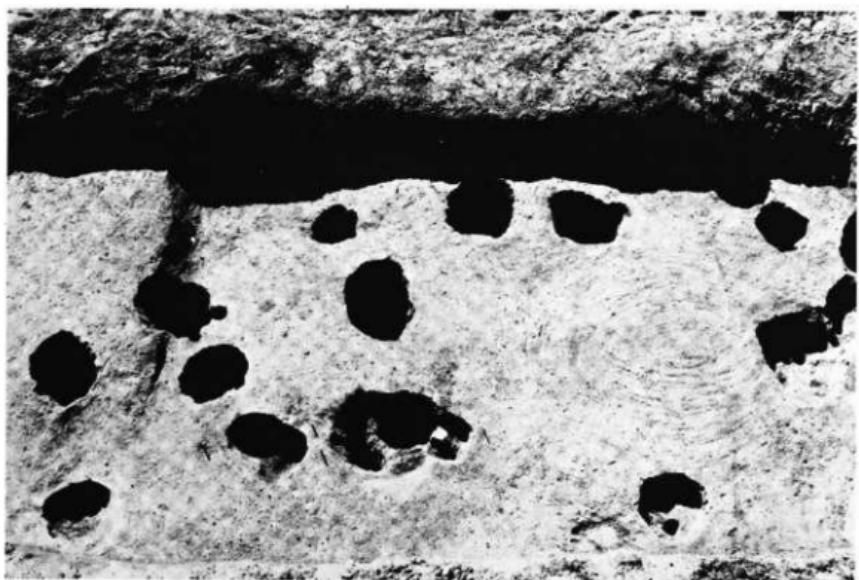
2 ピット群と屋外埋壙



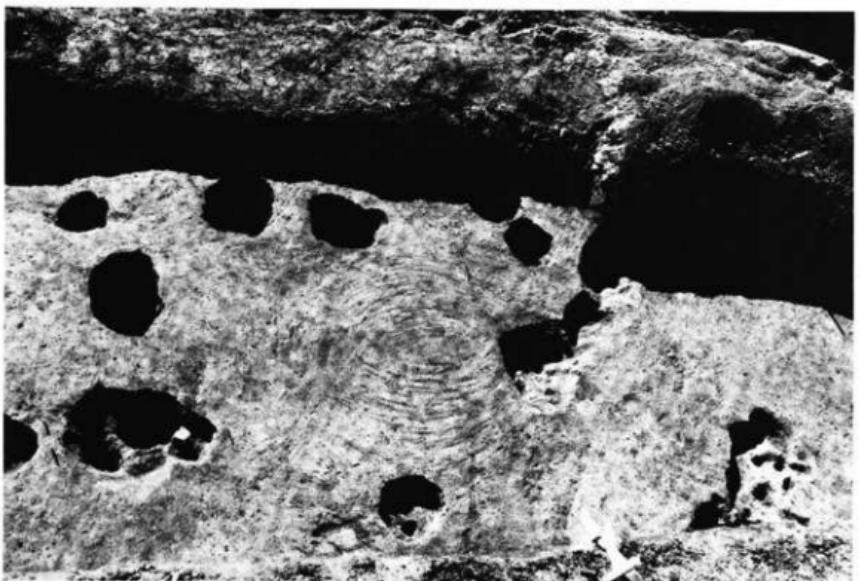
1 A-19・20・21北壁セクション



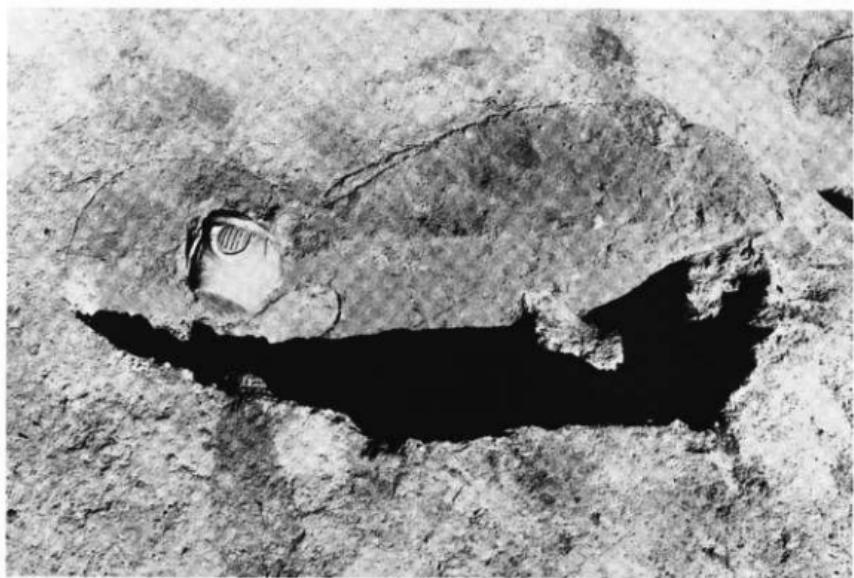
2 ピット群 (A-19・20)



1 ピット群 (A-20)



2 ピット群 (A-20・21)



1 P₁内土器出土状態



2 P₁と土器



1 Pt



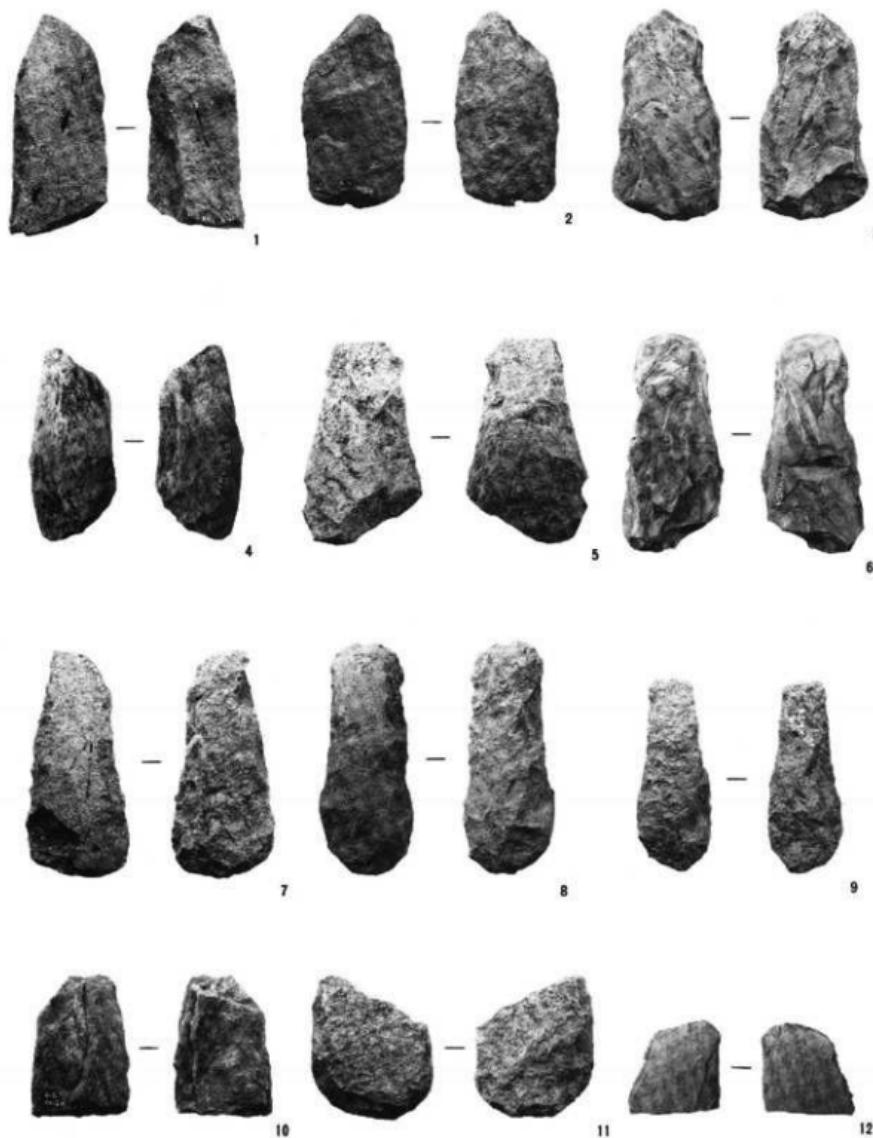
2 屋外埋甕発見状態



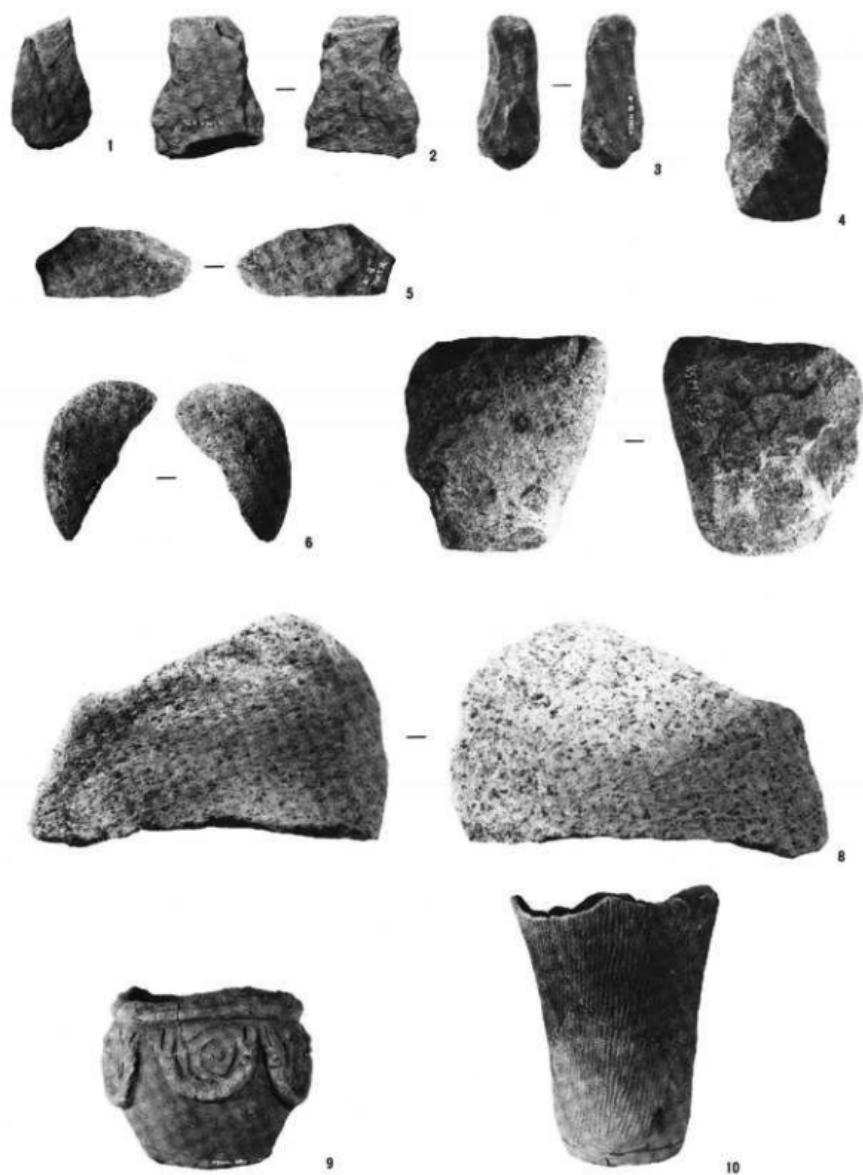
1 屋外埋壙埋設状態



2 屋外埋壙セクションの状態



出土石器 (1/3)



出土石器 (1/3) • 出土土器 (9—1/3 • 10—1/6)

新 水 掛

昭和56年 10月15日 印 刷

昭和56年 10月30日 発 行

長野県茅野市塚原2-6-1
発行所 茅野市教育委員会

印刷所 岡谷市川岸108番地
中央印刷株式会社

